

# 「消てふれ」百韻注釈

吉田 健一・松本 麻子

元和七年（一六二一）十月二十四日に興行された連歌百韻「消てふれ」の注釈をおこなった。発句は「消えてふれ見る度ごとを初深雪」で、里村紹巴の孫玄陳が詠んだ。脇句は昌俊。連衆には若かりし頃の西山宗因もあり、豊一の名で五句を詠んでいる。天理大学付属図書館蔵綿屋文庫『連歌集 玄仲等百韻外』に所収される百韻である。本文は『西山宗因全集 第二巻 連歌篇二』（西山宗因全集編集委員会編、二〇〇七年、八木書店）を使用した。作者についての記述は、『連歌辞典』（廣木一人、東京堂出版、二〇一〇年）、『国書人名辞典』（市古貞次他編、岩波書店、一九九三〜一九九九年）、『俳文学大辞典』（尾形功他編、角川書店、一九九五年）、『和歌大辞典』（犬養廉他編、明治書院、一九八六年）などによった。寄合語の項には、『連珠合璧集』（『連語論集一 中世の文学』、木藤才蔵・重松裕巳校注、三弥井書店、一九七二年）、『拾花集』『随葉集』『竹馬集』は、『近世初期刊行連歌寄合書三種集成 翻刻・解説編』深沢眞二、清文堂、二〇〇五年）を使用した。また、引用した和歌・俳諧については新編国歌大観・私家集大成（古典ライブラリー日本文学 Web 図書館）、連歌については国際日本文化研究センターの連歌データベースを参考にした。

底本の旧漢字、異体字は現行の字体に改めた。仮名書きとなっていない言葉の一部を漢字に改め、統一されていない表記は歴史的仮名遣いにし、踊り字を平仮名に改め、濁点のないものは濁点を施した。これらを底本どおりに復元できるよう、本文に振り仮名で示した。また、底本の難読字には括弧付きで振り仮名を付けた。同様に、歴史的仮名遣いと異なる表記についても、括弧付きで通常の歴史的仮名遣いによる表記を示した。各句には連番で番号を付した。明らかな誤写や脱字と思われる箇所はママとした。本稿の注釈は吉田が担当し、松本が最終的な加筆・修正を行った。

一消えてしまったらまたすぐに降れ。「さだめなき雲の絶え間の月影は消えて又降る雪かとぞ見る（二条院讃岐集・四五）などの歌例があるものの、消えたと思っただけ降るといふ意味の歌例は見いだせない。連歌例に「消えて降る一日や夏のふじの雪」（大発句帳・肖柏）がある。

二歌例に「美しと見る度ごとに撫子の花の盛りは懐しなきみ」（家持集・七七）がある。

三この冬最初の深雪。歌例に「初深雪降りにつけらしなあちら山こし

1 消てふれ見る度ごとを初深雪  
玄陳  
 消えては降ってほしい。見る度に初深雪となるように。

玄陳 連歌師。天正一九（一五九一）年〜寛文五（一六六五）年・一・五、七五歳。里村氏。

この百韻が催されたのは十月二十四日であり、この冬初めての深雪が降っていたのであろう。それに合わせて主客の玄陳は冬の句を詠んだ。

季節―冬（初深雪）

の旅人そりに乗るまで」（永久百首・三四八・源兼昌）がある。

一本文ママ。日が寒いので、の意。例に「日を寒み氷もとけぬ池なれやうへはつれなき深きわが恋」（源順集・二八）がある。

二山居の窓のこと。「山窓、山のあひ也。物の見ゆる躰也」（匠材集）。主催者の昌俊による謙遜した言い方。歌例に「二上の雲路はるかに呼ぶ声をしるべに分けし山窓の月」（雲玉集・三三二）などがある。また、「くる春の光とやみん消やらで山窓寒くつもる白雪」（邦高親王御詠・五一）には「山窓、歌にては猶不幽玄候敷」とある。俳諧の例に、『消てふれ』百韻に近い時期に作られた「山窓にふる薄雪や障子紙」（犬子集・一四三九・良徳）がある。

一鶯は春を告げる鳥とも呼ばれている。歌例に「鶯の谷よりいづる声なくば春来ることを誰か知らまし」（古今集・春上・一四・大江千里）、「梅が枝に結ぶ氷も春たてばとくと聞きつる鶯の声」（夫木抄・六九九・大宰大式高遠）などがある。

二聞いて判別すること。鶯の声を聞き分けるとを詠んだ歌に、「春やとき花や遅きと聞き分かむ鶯だにも鳴かずもあるかな」（古今集・春

## 2 日<sup>一</sup>を寒みひらく山窓<sup>二</sup>

昌俊  
初深雪のせいで日中になっても寒いので、せめて山窓を開けて外の景色を眺めてもらうことだ。

昌俊 佐河田氏。尚俊とも称したか。号は壺斎。天正七（一五七九）年〜寛永二〇（一六四三）年。六五歳。今回の連歌の会の主催者の句。場所は昌俊宅であろう。前句の「初深雪」に、「寒み」とつけた。雪が降り粗末な山居は寒いけれど、せめて山窓を開けて客人たちに外の景色でも眺めていただこうという趣向であろう。  
季―冬（寒み）

## 3 鶯の春待つ声は聞分きて

（山窓から聞こえてくるはずの）春を待つて鳴く鶯の声は、聞き分けられて。

禅昌

禅昌 元龜二（一五七一）年〜寛永八（一六三一）年。六一歳。父は松梅院禅永、子は禅意。里村紹巴と親しく、豊臣秀吉や毛利輝元の一族などに命ぜられ、古典の書写を行った。

前句の「ひらく山窓」に、山窓を開くと鶯の声が聞き分けられるので、「聞分て」と付けた。頭注二で挙げた『古今集』歌のように、まだ寒い冬であるが春を待ち望み、鶯の鳴き声は窓から聞き分けることができる、としたもの。

季―春（鶯）冬（春待つ）

上・三七・藤原言直）があり、本句の本歌であろう。

一 「かつ咲く」と「梅」を結んだ歌例に「袖の上にかつ咲く梅の花の香を深くぞしむる庭の春風」（草根集・二六八）がある。

二 歌例に「木のもとに宿とはいかに狩衣立ちやすらふも深き梅が香」（雪玉集・二〇〇）、「軒ちかみ咲きそふ木々の下風にかざさぬ袖も深き梅か香」（邦高親王御詠・九二六）などがある。

一 霞が園を取り囲む籬である、という意。霞を籬に見立てている。同じ趣向の歌に「たちどまる春のへだての霞こそ夏の籬と今日なりにつれ」（拾玉集・三〇八一）がある。

二 霞が園のまわりを取り巻いているさま。「めぐり」を詠む歌例は少なく、僅かな歌例に「山賤やめぐりのうばら引き捨てて花の色もる園の垣内」（松下集・三二四〇）がある。連歌例に「園のめぐりに高き村竹／かくろへて霞に花の色は惜し」（嵯峨千句・第六）などがある。

一 「砌」はきわ、の意。野辺の際まで春ののどけさが続いているということ。「砌につづく」と詠む歌例は確認できないが、類似した歌

### 4 かつ咲よりも深き梅が香

梅が咲くよりも早く、深い香りが漂ってきた。  
紹由

### 5 霞こそ園のめぐりの籬なれ

（梅が香の漂う）この霞こそが、園のまわりを取り囲む籬であることだ。  
宗順

### 6 砌につづく野辺の長閑さ

園をまわりを取り囲む籬の際まで続いている野辺の長閑な景色であることよ。  
道哲

紹由 生没年未詳。現存作品では文禄五（一五九六）年五月一〇日の紹之・能札との三吟『何船百韻』以降、元和八（一六二二）年二月二八日の百韻までの会に一座。慶長八年（一六〇三）年三月、文閑らの千句などにも参加。

前句の「聞く」を、香りを「聞く」と取りなし、梅が咲く前から花の香りを聞き分けることができると付けた。  
寄合 鶯トアラバ梅（連珠合璧集・三六三）

季一春（梅）

宗順 生没年未詳。寛永九（一六三二）年生存。古田織部・伊達政宗・智仁親王らの連歌会に参加し、安楽庵策伝とも交流があったとされる。

前句の「深き梅が香」のする霞が、園の周囲を取り巻いていると付けた。「古里の梅の籬やこれならむ霞のうちに鶯の声」（拾玉集・二九六三）が参考になる。

季一春（霞）

道哲 医者 生没年未詳 元和・寛永（一六一五〜四四年）頃の人。京都の人。晩年は堺に住す。法眼。

前句の「籬」を園の境界と取り、その際まで続いている

例に「さらにまた動きや出づるとばかりに砌の雪に続く山の端」(後十輪集・九三四)がある。  
二 野辺の長閑さを詠む歌例に「吹きうつりなびく薄の末々を長閑にわたる野辺の夕風」(風雅集・秋上・一四一・花園院)、「長閑なる野辺のひばりの声までも雲井にあがる道は迷はず」(宗良親王千首・九一)などがある。

一 「沢水」と「氷」と結んだ例に「里人は山沢水の薄氷とけにし日より若菜つみつ」(新後撰集・春上・二六・二条為氏)などがある。  
二 「月の氷」は澄んで氷のように見える月の光。また、月光が水に映って、きらきら輝くさま。歌例に「難波潟松の嵐に雲消えて月の氷に駕ぞ立つなる」(夫木抄・六九七七・慈鎮)、「大井川さやかにうつる秋の夜の月の氷にかかる白波」(新千載集・秋上・四三八・藤原為世)などがある。  
三 この言い回しの歌例に「山路より去年の落葉の流れ出でて雪げ知らるる春の山風」(雪玉集・四一九八)がある。水に映った月の姿が流れ出るといふ言い方は、豊一(宗因)自身の句である「月影も湯殿の外になかれ出」(宗因七百韻・一)がある。

一 底本「鶯」と読めるが、三句

8

鶯もさそふ風の浮き草

7 沢水の月の氷のながれ出て  
豊一  
沢水の際には、氷のように澄んでいる月が映り、月光がまるで水に流れ出ているよううで。

る野辺の長閑なさまを付けた。  
季―春(長閑)

豊一は宗因の別号。慶長一〇(一六〇五)年、天和二(一六八二)年・三・二八、七八歳。西山氏。連歌師・俳諧師として名を成した。

前句の「砌」を「水限」と見て、沢水と応じた。「水限」には冴え冴えとした月の光が映り、月が水とともに流れてくようだと詠む。「おき氷る夜夜半の砌の霜の上にふけてさえしむ庭の月影」(伏見院御集・一四一〇)などの歌札があるが、月光が「流れ出て」と表現した点が眼目。七句目は月の定座。春から秋に転じた。

季―秋(月)

信助 不明

にも鶯が詠まれており、前句は秋の句でもあつて不審。誤写か。類似した言い回しの歌の例に、「花の香を風の便りにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる」（古今集・春上・一三・紀友則）がある。

二 歌例に「朝露もちりかひなびく柳風鶯さそへ池の浮き草」（草根集・五〇七）、「人はみな風の浮き草かたよりになびきてぞみる青柳の糸」（挙白集・一四八）がある。

一 田に降る雨を「涼し」とした歌例に「暮れかかる外面の小田のむら雨に涼しさそへてとる早苗かな」（風雅集・洞院公泰・三四九）があり、類似した趣向である。

二 「田づら」は、田のあたり。田のほとり。また、田。歌例に「早苗をば田づらの雨にとりわびて賤が袂や濡れまさるらん」（常縁集・七七）などがある。

三 この言い回しの歌例に「神無月いかに時雨るる雨ならん里わくころも知らぬ袖かな」（心敬集・五七）などがある。

一 苦で屋根を葺いた家。苦葺きの粗末な小屋。苦屋を詠んだ歌としては「見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苦屋の秋の夕暮れ」（新古今集・秋上・三六三・藤原定家）がよく知られている。

二 松の木の根。歌例に「大伴の高

沢水の上の風に漂う浮き草は、鶯も誘っていることだ。

9 涼しさを暮るる田づらの雨ならん  
涼しさを感じるのは、風が吹いて、夕方の田の表に雨が降ったからだろう。

10 苦屋に帰る松がねの道  
田づらに雨が降って涼しくなった夕暮れに、苦屋に帰って行く人がいる。松の根が見える道を通って。

月の光が映る沢水に、浮き草を付けた。頭注に挙げたように「鶯」が不審であるが、風がに漂う浮き草が、誘っているようだと言んだ。

寄合 誘ふトアラバ浮草  
（連珠合璧集・八六一）

季―春（鶯）夏（浮き草）

慶純 生没年未詳。天正く元和（一五七三〜一六二四年）頃の人。中村氏。京都の人。紹巴の門人。茶道を小堀遠州に学ぶ。

前句の「浮き草」の生える所を「田づら」と応じた。

寄合 草に田づら（拾花集三三六）

季―夏（涼しさ）

行生 不明

前句の「涼しさや暮るる」を「夕涼み」と取りなし、「松がねに夕涼みする浦人の心も知らず潮ぞ満ちくる」（万代集・七五七・藤原家隆）から「松がね」と付けた。

季―無季

師の浜の松が根を枕き寝れど家し  
偲はゆ」(万葉集・卷一・雑・六六  
・置始東人)、「松がねも岩ほも苔  
の道たえて落葉にむせぶ山の下水」  
(草根集・九六〇一)などがある。

一 山賤は、獵師・きこりなど山  
中に生活する、身分低く情趣や条  
理を解さない人。また、ひろく身  
分の卑しい者をいう。歌例に「山  
賤と人は言へども時鳥まづ初声は  
我のみぞ聞く」(拾遺集・夏・一〇  
三・坂上是則)などがある。「山賤」  
が獵師やきこりの住む家の意味で  
用いられることもある。その用例  
として、「あな恋し今も見てしが山  
賤の垣ほに咲ける大和撫子」(古今  
集・恋四・六九五・よみ人しらず)  
がある。

二 重い薪を運ぶことを詠んだ歌と  
して「山人の歌ふ声さへたどたど  
し重き薪のくるるかけちに」(後十  
輪集・一三九六)、「山人の重き薪  
の道遠み急ぐとするも暮るる空か  
な」(同前・一三九八)などがある。

一 歌例に「やましるのいはたの  
早苗とるたごのつかれに休む森の  
下かけ」(夫木抄・二五六二・藤原  
信実)、「かりわたる疲れの鳥にあ  
はんとや恋する鷹の空にまつらん」  
(同前・七四〇三・藤原頭仲)。  
二 「駒休む」の歌例に「駒なべて

11 山賤のおもき薪は取捨てて  
松が根の道を急ぐ山がつは、重い薪を捨  
てて行くことだ。 玄的

12 つかれ来ぬれば 駒休むらし  
重い薪を運ぶのに疲れてしまったので、  
馬も休むようだ。 政直

玄的 里村北家の連歌師。文禄二(一五九三)年、慶  
安二(一六五〇)年、五八歳。伝翁。玄仍の次男。兄  
は玄陳。宗因との両吟や、風庵の追善独吟百韻など  
を行った。後に法橋に叙せられた。

前句の苦屋に帰る人物を山中で暮らす山がつに見立て  
た。背中の重い薪を道ばたに置いて家路を急ぐのであ  
ろう。

季―無季

政直 俳諧作者。生没年未詳。寛永二〇(一六四三)  
年ごろ没か。本名、中井次兵衛。『俳諧大系図』に載る  
鈴木氏は同一人か。『犬子集』『鷹筑波集』『毛吹草』な  
どに句が多く載る貞門初期の俳士。貞徳判独吟百韻も  
ある。

前句で重き薪を取り捨てたが、それは薪を運んでいた

ここにしばしや休らはんみまぐさも良きあすか井の陰」(夫木抄・一二四四二・野宮左大臣)、「雨にますみづの御牧の草がくれからでも駒の休む日はなし」(草根集・二四〇二)などがある。

一 「まだき」は、早い時期、時点。歌例に「誰が秋にあらぬものゆゑ女郎花なぞ色にいでてまだき移ろふ」(古今集・秋上・二三二・紀貫之)、「淡雪は降りもやまなんまだきより待たるる花の散るとまがふに」(玉葉集・春上・三二・藤原為家)など。

二 「旅の宿り」の歌例に「草枕旅の宿りの露けくははこぶばかりの風も吹かなん」(御堂関白集・三五)がある。

三 旅の衣装。歌例に「かり衣たちうき花のかけに来て行く末くらす春の旅人」(玉葉集・旅・一一三二・藤原定家)、「かり衣袖の涙にやどる夜は月も旅寝の心地こそすれ」(千載集・羈旅・五〇九・崇徳院)などがある。

一 歌例に「ははそ山峰の嵐の風をいたみふる言の葉をかきぞ集むる」(後撰集・雑四・一二八九・紀貫之)がある。  
二 峰を越え切ることができないこと。歌例に「越えのこす峰の白雲今日も又よそめばかりの花にく

13 速一(まだき)より旅二の宿り三をかり衣 住円  
馬が疲れてしまったので早い時間に旅の宿りを借りた。狩衣姿で。

馬が疲れたからであったことを明かす。  
季―無季

住円 不明

前句を馬での旅の句と取りなし、馬が疲れてしまったので早い時間に宿に入ったとした。なお、「かり衣」は「宿りを借り」と「狩衣」を掛ける。

寄合 宿り求るには…駒の疲るゝ… (随葉集三九三)

季―無季

14 岑一の嵐二に越え三のこす袖 順息

旅の宿りを出て、峰を越えようとしたが、嵐のために越えられないで居る。かり衣の袖までも。

順息 不明

前句の「かり衣」に、いづくにか今夜は宿をかり衣日も夕暮の峰の嵐に」(新古今集・羈旅・九五二・藤原定家)を基に「岑の嵐」と付けた。

寄合 かり衣には…越残す山 (拾花集二八)

らしつ」(柏玉集・二二一七)、「こえ残す嶺の嵐の今宵だに夢やはたのむすずのかりふし」(春夢草・一九七一)など。

三 衣装の一部として峰を越える袖を詠んだ歌に「嶺こゆる雲の衣をぬぎすててくだれば薄き袖の上風」(草根集・三〇一八)がある。

一 「紅葉」と「時雨」を結んだ歌に「行く秋の形見なるべき紅葉ばもあすは時雨と降りやまがはむ」(新古今集・秋下・五四五・藤原兼宗)、「むら雲の時雨れてそむる紅葉ばは薄く濃くこそ色にみえけれ」(千載集・秋下・三五四・覚延法師)などがある。

二 「がまし」は「…らしい」、「…のきらいがある」の意。歌例に「深山辺の時雨てわたるかすごとにかごとがましき玉がしはかな」(千載集・冬・四一一・源国信)など。

三 「紅葉」と「散る」が共に出てくる歌として「槇の屋に時雨の音の変るかな紅葉や深く散り積らむ」(新古今集・秋下・五八九・藤原実房)、「時雨れつる雲も日影に染められて紅葉を散らす峰の木枯」(拾員愚草員外集・三九一)などがある。

一 「寢覚めさびしき」が出てくる歌に「来し方を思ひ出でずは暁の寢覚の床やさびしからまし」(新千

### 15 紅葉ばも時雨がましく散出て

峰を覆っている紅葉の葉もまるで時雨のようにばらばらと散り始めた。昌琢

三) かり枕 付合ニハ…こえ残 す山…(竹馬集四四五) 季―無季

昌琢 里村南家初代。天正二(一五七四)年?寛永一三(一六三六)年。昌叱の子。母は紹巴の娘。子は昌程。紹巴をはじめ主要連歌師たちが没した慶長頃から、連歌界の第一人者となった。

前句の「嵐」から寄合語の「嶺の木ノ葉」を想起し、それを「紅葉ば」に転じた。 寄合

嵐トアラバ…嶺の木ノ葉…(連珠合璧集五〇) 紅葉トアラバ…時雨…(連珠合璧集三一八) 季―秋(紅葉ば)

### 16 寢覚めさびしき秋のあかつき

紅葉が時雨のようにパラパラ降ったので昌幌

昌幌 里村南家。天正一六(一五八八)年、慶安四(一六五一)年。六四歳。昌叱の子で、兄に昌琢、子に昌通がいる。

載・雑下・二二一六・よみ人しらず）がある。

二「秋の寢覚めの寂しさを詠んだ歌に、「秋深み寢覚めの床のさびしきにあはれをそふる虫の声々」（教長集・四七〇）、「暁の寢覚めの空にさびしきは霞隠れの有明の月」（他阿上人集・四一七）などがある。

三「秋のあかつき」の歌例に「山寺に秋の暁寢覚めて虫とともにぞなきあかしつる」（明恵上人集・四二）などがある。

一「きりぎりす」は「こおろぎ」の古名。歌例に「きりぎりすそことは見えぬ庭の面のくれゆく草のかげになくなり」（新後撰集・秋下・三九九・後二条天皇）など。

二「人以外のものを友とする歌に「いかにせん佐保の川原の霧の間に我が友千鳥鳴きてたちぬる」（拾玉集・四三五四）、「うき身をも思ひな捨てそ秋の月昔より見し友ならぬかは」（続後撰集・秋中・三六八・藤原隆房）などがある。

三「狭筵」は幅の狭い筵。また、短い筵。歌例に「さむしろに衣かたしき今宵もや我をまつらん宇治の橋姫」（古今集・恋四・六八九・よみ人しらず）、「きりぎりすなくや霜夜のさむしろに衣かたしき独りかも寝ん」（新古今集・秋下・五一八・九条良経）などがある。

目が覚めてしまった、寂しい秋の明け方である。

17 きりぎりす我友ならぬ狭筵に

寂しい明け方には、きりぎりすが私の友というわけでもないのに私の寢床である狭い筵によく来てくれる。

宣滋

前句の「時雨」に「寢覚め」と付けた。寄合

時雨トアラバ、…ね覺…  
（連珠合完璧集三九）

季―秋（秋のあかつき）

宣滋 不明

前句の「さびしき」に「我友ならぬ」と付けた。友と一緒にあれば寂しさが紛れるが、まだそこまでの仲ではないので、「我友」を「ならぬ」と否定したのである。きりぎりすを友としたいとする歌に「なきあかす友とは聞けどきりぎりす思ふ心はかよひしもせじ」（玉葉集・秋上・六一七・京極為教がある）。

季―秋（きりぎりす）

一 「月」と「涙」を結んだ歌に「いかにせんさらで憂き世はなぐさま  
ず頼みし月も涙落ちけり」(千載集  
・雑上・一〇〇四・藤原定家)、「夜  
な夜なの月も涙にくもりにき影だ  
に見せぬ人を恋ふとて」(新千載集  
・恋一・一一四八)などがある。

二 「そふる」の歌例に「あはれ知  
る空も心のありければ涙に雨を添  
ふるなりけり」(山家集・八二九)  
がある。

三 草葺きの粗末な家。歌例に「こ  
やの池の芦の枯葉の草ぶきや共寝  
のをしの栖なるらん」(夫木抄・六  
九三六・藤原俊成)、「今夜こそ月  
をいれけれ草葺の露も雫も深き軒  
端に」(今川氏真詠草・五〇〇)。

一 「おとろふる世」は自分を含め  
て衰えてしまった世のこと。歌例  
に「なに事もおとろふる世に思ふ  
かなさこそ昔の秋の夜の月」(拾塵  
集・八四三)がある。

二 歌例に「時鳥木ぶかき森の一  
声は世に忍ぶらん程をしれとや」  
(柏玉集・四七七)、「方々にはか  
なかるべきこの世かな有を思ふも  
なきを忍ぶも」(西行上人集・三九  
四)など。

一 「つらぬ」は「つなぐ」、「連続  
させる」の意。歌例に「紫につら  
ぬる袖やうつるらん雲の上まで匂  
ふしら菊」(玉葉集・秋下・七七四

18 月も涙やそふる草ぶき

重信

きりぎりすが鳴いているのは泣いている  
のだろう。その夜に自分も月を見ているう  
ちに涙が出てきたので、それをきりぎりす  
の泣き声に添えた。草葺きの家で。

重信 不明  
前句の「友」に「月」を付けた。  
寄合  
友トアラバ、花 月 雪：  
(連珠合璧集五三二)  
季―秋(月)

19 おとろふる世に忍ぶこそ昔なれ

貞重

草葺きの古屋に住む自分だけでなく世も  
衰えてしまった。そんな中でしのぶのは、  
さかんだった昔のことだけだ。

貞重 不明  
前句の「草ぶき」を草葺きの古家の軒端と取りなし、「百  
敷きや古き軒ばのしのぶにも猶余りある昔なりけり」  
(続後撰集・雑下・一一〇四・順徳院)から、「忍ぶ」  
と付けた。  
寄合  
忍草トアラバ ふる屋の軒端 昔 軒の板間：(連  
珠合璧集二五九)  
季―無季

20 つらぬるままの歌の哀さ

景治

衰えてしまった世と違って、連続と連な  
る歌には深い趣がある。

景治 不明  
前句の「おとろふる」に「つらぬる」と付けた。  
「歌の哀さ」は、『古今集』仮名序の「生きとし生ける

・西園寺実氏)など。句例に「頼政がおもひ入たる恋心(政信)／連ぬる歌の義理の深さよ(安静)」(紅梅千句・六二五／六二六)がある。

二 歌例は見いだせない。俳諧の例に「歌のあはれは読むすべしらず／あたら夜の月と花とをうかうかと」(時勢粧・三二八九／三二九〇)、「鬼しうはなき心を見せん／人知れず歌の哀れをかき口説き」(同前・六二八〇／六二八一)などがある。

一 「花にあかぬ」を用いた歌の例に「花にあかぬ心ならひに夏衣けふ白妙の袖もものうし」(宝治百首・八四〇・下野)がある。  
二 「心」と「いはふ」を結ぶ歌例に「春日野に若菜摘みつつ万代を祝ふ心は神ぞ知るらん」(古今集・賀・三五七・素性法師)がある。句例に「謹んで屏風の絵なる月を見て／今日の賀祝ひ申す口上(宗因千句・六九七／七〇)がある。

一 歌例に「末遠き春のむかへのみつぎもの数々はこぶにまの里人」(夫木抄・一四五七・大蔵卿数隆)などがある。連歌の例として、慶長九(一六〇四)年六月二八日興行の百韻に「下が下まですなほなる時／盃は数々にしもとりかはし」(四四／四五)がある。

21 花にあかぬ心<sup>二</sup>をいはふ<sup>三</sup>今日の賀<sup>昌俊</sup>

花に十分満足していない心持ちのようであるが、雅楽を奏してお祝いするとしよう。今日のめでたい席で。

22 かずかず酌む<sup>二</sup>春のさかづき<sup>三</sup> 玄陳

今日の賀を祝って何度でも酌むことにより、春のさかづきを。

ものいづれか歌を詠まざりける」の段を下敷きにしていると思われる。

季―無季

昌俊 不明

前句の「歌」(和歌)をめでたい席での祝いの歌(雅楽など)と取りなし、これに「いはふ」と付けた。

寄合

歌 付合ニハ：くむ酒 賀<sup>よろこび</sup>： (竹馬集五九九)  
哥トアラバ：いはひ： (連珠合璧集八二〇)

季―春(花)

前句の「いはふ」に「酌む」と付けた。なお、本句には『源氏物語』『花宴』の「花のほひもけおされてなかなかことざましになむ」の面影があると思われる。

寄合

賀 付合ニハ 酒の席  
祝言<sup>ことぶき</sup> 付合ニハ 立春：酌<sup>くむ</sup> 酒： (竹馬集六二二)

二 歌例に「散る花をけふのまとの光にて浪間にめぐる春のさかづき」(夫木抄・一七三九・藤原良経)、「かきながすはの字の水は絶えはてて空にのみ見る春のさかづき」(夫木抄・一七五三・権僧正公朝)などがある。

一 歌例に「あまを舟ひき網の綱のながき日はくるるもほどのさもぞひさしき」(新六帖・二二八)、「青柳のかづらき山の永き日は空もみどりにあそぶいとゆふ」(夫木抄・一〇〇四・藤原定家)などがある。

二 歌例に「秋山にきばむ木の葉のうつろはばかはるがはるや秋を見まほし」(和歌童蒙抄・九五六)がある。句例に「かはるがはる薪の能を芝の上」(時勢粧・四六五八・次末)がある。

三 「鞆の袖」の歌例、句例、連歌の例はいずれも見いだせない。「鞆」、袖のの用例としては、「鞆の庭に桜柳をうつしおきて春は錦に立ちやまじらん」(夫木抄・一五一六八・藤原為家)、「袖ふれし宿の形見の梅が枝に残る匂よ春をあらすな」(藤原家定)、「拾遺愚草・一一〇七)がある。

一 「あるじがら」(主柄)は、主人の人柄。歌例に「移し植ゑし宿の梅とも見えぬかなあるじがらにぞ

23

永<sup>一</sup>き日<sup>二</sup>はかはる<sup>三</sup>がはるの鞆<sup>三</sup>の袖

春の酒を酌み交わす永き日、庭では若者たちが代わる代わるに蹴鞆をして、袖を揺らしている。

紹由

季―春(春)

前句の「春」に「永き日」と付けた。なお、本句は『源氏物語』「若菜上」で女三宮の子猫が御簾を上げたため、柏木が女三宮を見る場面の少し前、若者たちが庭で蹴鞆に興じている場面の面影がある。

寄合 春の心、春といふ詞を添へてはなにともしふべし)

月の霞む(臙とも 三日月 在明 おぼろ) : 永日(遅日 春の日) : (連珠合璧集八八九)

季―春(永き日)

24

主<sup>一</sup>が<sup>二</sup>ら<sup>二</sup>に<sup>二</sup>や<sup>二</sup>誰<sup>二</sup>も<sup>二</sup>と<sup>二</sup>ふ<sup>二</sup>宿

あるじの人柄が良いゆえであろう。代わ

昌俊

前句の「かはるがはる」に「誰もとふ」と付けた。

季―無季

花も咲きける」(風雅集・雜上・一四四七・平経盛)、「わが宿の桜はかひもなかりけりあるじからこそ人も見にくれ」(後拾遺集・春上・一〇二・和泉式部)などがある。

二「誰もとふ宿」に関連する歌に「秋の夜はたづぬるやどに人もなしたれも月にやあくがれぬらん」(玉葉集・秋下・六七〇・二条院讃岐)、「教へしをさぞとばかりにとふ宿のあらぬいらへに答へわびぬる」(雪玉集・一八五〇)などがある。句例に「誰もとふ志賀氏や雪の花見酒」(時勢粧・一九六九)などがある。

一 歌例に「雪にさへ霞に色ぞおぼるなる春立つ今日の冬の夜の月」(夫木抄・一六・飛鳥井雅有)、「雪にさへ尋し跡の山のかげ道なきまてに咲ける卯花」(十市遠忠詠草・二八一)など。

二「道とめて」の歌例に「絶せしな雪はふるとも道とめて子日の小松ひけるためしは」(十市遠忠詠草・二二)などがある。

三「山の陰」の歌例は「ひぐらしの鳴きつるなへに日は暮れぬと思ふは山の陰にぞありける」(古今集・秋上・二〇四・よみ人しらず)、「山陰や友をたづねしあとふりてただ古への雪の夜の月」(夫木抄・七二七三・九条良経)など多数見いだせる。

る代わるに誰もが訪ねてくる宿であることだ。

25

雪にさへ道とめて入る山の陰

道哲

雪が降っていてさえ、あるじの人柄が良  
いので、行く道を中断して、旅程から外れ  
るが、山の陰に入ってゆく。

前句の「あるじがら」に「道とめて入る」と付けた。  
あるじの人柄が良いので行く道を中断して訪ねた、と  
いう心持であろう。

付合ニハ：雪の友：  
(竹馬集四八九)  
宿トアラバ：たちよる：  
(連珠合璧集六三六)

季一冬(雪)

一「狩場の鳥」は雉(まじ)のこと。鷹狩の際用いる語。歌例に「はし鷹の狩場の鳥の落ち草を吹きな乱りそ野辺の夕風」(新葉集・冬・四九八・藤原為忠)など。句例に「はい鷹は狩場の鳥の箒哉」(犬子集・一五〇三・氏重)などがある。

二「落草」は鷹が鳥を追い落とした草原。また、鳥が飛びおりて隠れる草むら。歌例に「御狩する片山かげの落草に隠れもあへず(た)起つきぎすかな」(風雅集・冬・八七一・藤原公泰)、「今日はまた狩場の鳥の落草もはやくるすのに宿やとはまし」(文保百首・二〇六一・頓覚)などがある。

一「暮ぬ」は日が暮れたこと。歌例に「今ははや鳥だちも見えず暮れぬなり交野の野守こよひ宿かせ」(文保百首・二二六五・藤原雅孝)、「散りかかる花ゆゑ今日は暮れぬれば朝たつ道もかひなかりけり」(続拾遺集・春下・一〇七・権中納言通俊)など。

二「交野」(片野とも)は大坂府枚方・交野市付近の台地。平安以降、皇室の狩獵地であった。歌例に「思ひあへず袖ぞ濡れぬるかり衣交野のみの暮方の空」(拾玉集・七六八)、「霰降るかた野の御野の狩衣ぬれぬ宿かす人しなれば」(詞花集・冬・一五二・藤原長能)など。

## 26 狩場の鳥の遠き落草二

宗順

道を中断してまで山の陰に入ったのは、鷹に捉まえられそうになった狩場の鳥が逃げ隠れたであろう遠くの落草を探し求めてのことだった。

前句の「山の陰」を「山の陰の家」(隠家)と取りなし、「鳥の…落草」と付けた。  
寄合  
隠家トアラバ…鳥の落草…  
(連珠合璧集五六四)

季…冬(鳥の落草)

## 27 暮ぬれば交野の御野の寒々三て

信助

日も暮れてきたので、鷹狩りをしていた交野の御狩場も寒くなってきた。

前句の「狩場」に「片野」と付けた。  
寄合  
雉トアラバ…片野…  
(連珠合璧集三六七)

季…冬(寒々て)

三 さえざえて。歌例に「さむしろの夜はの衣手さえざえて初雪白しをかのべの松」(新古今集・冬・六六六二・式子内親王)、「冬深きみ山の嵐さえざえて伊駒の岳に霰降るらし」(続後拾遺集・冬・四七七・源実朝)などがある。

一 笹で作った戸のこと。歌例に「開きかくす野守が庵のささの戸もあらはにおける萩の朝露」(新拾遺集・雑上・一六〇六・藤原家隆)、「そのままに杉の庵のささの戸をただあけたつる風にまかせて」(草根集・九六七八)などがある。  
二 「戸ざし」は戸を閉めること。歌例に「あしびきの山桜戸にとざしせよ花のあたりに風もこそ入れ」(重家集・二八四)など。  
三 歌例に「我が恋は松を時雨のそめかねて真葛が原に風騒ぐなり」(新古今集・恋一・一〇三〇・慈円)、「風さわぐ雲のふるまひただならでかねて待たるる夕立の空」(夫木抄・七八二五・西園寺実氏)などがある。

一 「夢さます」の歌例に「夢さます声は思ひもかけ鳥の浪うつ宿の磯の旅寝に」(草根集・八九五三)、「立とまる影もはかなき草の庵雨やいく世の夢さますらん」(再昌草・四五五四)などがある。  
二 「枕さびし」の歌例に「わが背

28 <sup>一</sup> <sup>二</sup> <sup>三</sup>  
わたしの戸ざしに風さはぐ也  
豊一  
御狩場の庵の笹で編んだ戸を閉め切つて  
いると、時々風が当たつて騒々しい音を立  
てる。

29 <sup>一</sup> <sup>二</sup> <sup>三</sup>  
夢さます枕さびしき雨そそぎ  
行生  
笹の戸に当たたる風の音で夢が覚めてしま  
った。ひとり寝をしている庵に今度は枕を  
いっそう寂しく感じさせる雨が降り注いで  
きた。

前句の「交野」に、「逢ふことはかた野の里の笹の庵し  
のに露散る夜半の床かな」(新古今集・恋二・一一一〇  
・藤原俊成)から「ささ」と付けた。  
季語―無季

前句の「風さはぐ」に、同じ氣象表現の「雨そそぎ」  
を付けた。  
寄合  
風 付合ニハ：ねられぬ枕 ； (竹馬集五六  
四)なお、前句の「ささ」と本句の「夢さます」とを  
関連付ける歌に「ささの上の霰たばしる冬の夜はいく  
たび人の夢さますらむ」(拾玉集・四六一〇)がある。

子がありかも知らで寝たる夜はあ  
か月がたの枕さびしも」(拾遺集・  
恋三・八〇三・よみ人しらず)、「う  
ちわたしひとり襖の夜な夜なは枕  
さびしき音のみぞ鳴く」(夫木抄  
・一六七六九・大宰大貳高遠)な  
どがある。

三 歌例に「この世にて物思ふ袖も  
くたしけり雨そそきする軒の橘」  
(玄玉集・六三三) などがある。

一 歌例に「涙がは身もうきぬべ  
き寝覚めかな儂き夢の名残りばか  
りに」(新古今集・恋五・一三八六  
・寂蓮)、「さむるよりやがて涙の  
身にそひて儂き夢に濡るる袖かな」  
(続千載集・哀傷・二〇六九・大  
江宗秀) などがある。

二 「衣々の跡」の歌例に「衣々の  
跡なしごと世にふりぬ花にかへ  
りし道芝の露」(草根集・八四七  
四)、「鳥の音におきわかれつる衣  
々の涙かわかぬ今朝の床かな」(続  
千載集・恋三・一三七六・遊義門  
院) などがある。

一 「物おもふ」の歌例に「涙川何  
みなかみを尋ねけむ物思ふ時のわ  
が身なりけり」(古今集・恋・五一  
一・よみ人しらず)、「もの思ふ雲  
のはたてに鳴きそめて折しもつら  
き秋の雁がね」(国一巻一・一一新  
続古今集・秋下・五二四・贈従三  
位為子) など。

30 一 涙 なみだはかな 儂 なま 衣々の跡 ころも  
夢さます雨と思つたのは私の涙だったの  
だろうか。あなたが帰ったあと、涙がはか  
なく衣に残っている。

慶純

31 一 物おもふ ものおもふ 折しも をりしも 月に つきに 鐘なりて かねなりて  
きぬぎぬの別れのあと、月を眺めながら  
物思いにふけつていと、暁の鐘が鳴った。

政直

季―無季

前句中の夢さます「雨」を衣々の別れの後に流した涙  
と取りなし、「衣々の跡」と付けた。

寄合

雨 付合ニハ：おつる涕： (証歌) はるさめのふ  
るは 涕か桜花ちるをおしまぬ人 しなければ 古今  
集・春下 ・八八・大友黒主  
(竹馬集五六一)

雨トアラバ：涙：

(連珠合璧集三四)

夢トアラバ：はかなき：

(連珠合璧集五四九)

季―無季

恋―なみだ、衣々の跡

前句の「衣々」(後朝)に「鐘なりて」と付けた。

きぬぎぬの別れの朝に暁の鐘が鳴ったとする和歌の例  
に「面影も別れにかはる鐘の音にならひ悲しきしの  
めの空」(拾遺愚草・八六六) などがある。

寄合

別 わか

句作：きぬ／＼：  
付合ニハ：鐘のね：

(竹馬集二一一)

二 歌例に「折しもあれ物おもふ宿の月影にいかなる笛の声をそふらん」(称名院歌集・一四九五)がある。

三 「月」と「鐘」とを結ぶ、類似した趣向の歌に「さならでも寝られぬものをいとどしく月おどろかず鐘の音かな」(後拾遺・誹諧・一二一・和泉式部)がある。このほかの例に「限りあれば明けなむとする鐘の音に猶長き夜の月ぞ残れる」(新勅撰・秋下・二九二・藤原家隆)などがある。

一 歌例に「急がずはひかりと見てぞ歎かまし半ば過ぎゆく我が身なりとて」(栄花物語・五五八)、「名こそあれわが身の年も半にて見し世の月の秋ぞかへらぬ」(草根集・三九三三)などがある。

二 歌例に「虫の音もあはれぞまさる浅茅原なかば過ぎゆく秋ぞとおもへば」(物語二百番歌合・三三六・中納言のきみ)などがある。また、過ぎてゆく秋に自身の老いを重ねた歌に「過ぎて行く秋のかなしと見えつるは老いなむ事を思ふなりけり」(夫木抄・五五五・大江千里)がある。

一 「消ぬ」の歌例に「打ちすてて君しいなばの露の身はきえぬばかりぞ有りと頼むな」(後撰集・羈旅・一三一〇)、「露ばかり頼めしほ

32 我身を秋も半ば過ぎけり

物思いをしながら月を眺めていたら鐘が鳴って、自分も秋も半ばを過ぎたことに気づいた。

玄的

季―秋(月)

前句の月に秋を付けた。これは最も常套的な付け方とも言えるが、本句の場合はそれにとどまらず「くまもなき空行く月を見る程に秋の半ばのこよひ過ぎぬる」(久安百首・五三八・藤原隆季)の本歌取りと思われる。

寄合 月トアラバ…秋の夜…(連珠合璧集一二二)

季―秋(秋)

33 消ぬこそあやしき露の命なれ

自分の身も半ばを過ぎて、最後には消えてしまう頼りにならない露の命のようなも

順息

前句の「半ば過けり」にその先に起こる「消えぬ」を付けた。  
寄合 露トアラバ…消…命…

どの過ぎゆけば消えぬばかりの心地こそすれ（菅原輔昭）（拾遺集・恋一・六八九・菅原輔昭）などがある。

二 歌例に「（拾遺集・六八九への返し）露ばかり頼むることもなきものをあやしや何に思ひおきけん」（同前・六九〇・よみ人しらず）、「あだし野の萩の末葉の露よりもあやしくもろきわが涙かな」（夫木抄・四一五四・源雅光）など。

三 この言い回しの歌例は「ながらへば人の心も見るべきに露の命ぞ恋しかりける」（後撰集・恋五・八九四・よみ人しらず）、「身に代へていざさは秋を惜しみみんさらでももろき露の命を」（新古今集・秋下・五四九・守覚法親王）など多数ある。

一 類似した歌の例に「しほれぬる霜の草くき踏みしたき夕日隠れに百舌渡る見ゆ」（今川為和集・一二〇）、「萌えにけり霜の岡のべかき分けて草根にたれか春を告ぐらん」（雪玉集・二六三）などがある。二 「まつ松の声」に類似した歌例に「問ふことをまつ松山の山彦はいかがは独りおとづれをせん」（元良親王集・一四）がある。「松の声」は風が松の木立に当たって鳴る音のことであるが、その歌例として「陰にとて立ち隠るれば唐衣濡れぬ雨降る松の声かな」（新古今集・

のだ。

（連珠合璧集三八）

季―秋（露）

### 34 霜の草ねのまつ松の声

露と同じようにはかなく消えてしまいう霜が降りた草の根が松風の音のするのを待つている。

昌琢

前句の「露」を「霜」に転じ、霜の降りた草の根が松風の音のするのを待っているとした。  
季―冬（霜）

雑中・一六八三・紀貫之)、「山里は峰にたえせぬ松の声木の葉に忍ぶ谷の下水」(夫木抄・一三七一五・式子内親王)などがある。

一 「庭の面に秋見しよりもさやけきは落葉の霜にこぼる月影」(続草庵集・二八〇)、「庭の面に秋のかたみを残しつる木の葉も見えずけさの朝霜」(新千載集・冬・六三三・久明親王)などがある。

二 朝日が冷たくさすさま。「影冷じ」と詠む歌例に「すむ月の影冷じく更くる夜にいとど秋なる萩の上風」(続古今集・秋上・三九七・西園寺実氏)、「年を経ていただく霜の蓬生に影冷じく更くる月かな」(新葉集・雑上・一一二二・洞院公泰)などがある。

三 朝附日は朝方の日のこと。歌例に「朝附日さすや高嶺の山路よりとほらぬ野辺にいづる鹿の音」(拾玉集・二五九三)、「朝附日にほひは空にほのめきて山のはかすむ春の明ぼの」(文保百首・七〇一・藤原公顕)などがある。

一 「嵐」と「池」または「浪」を組み合わせた歌の例に「暑さをば松の嵐にをさめ置きて秋を浮かぶるすみのえの池」(夫木抄・三六四一)、「時わかぬ波さへ色に和泉川ははその森に嵐吹くらし」(新古今集・秋下・五三二・藤原定家)な

35

庭の面に影冷じき朝附日

昌俛

霜が降りた草の根の生えている庭の面に寒々しい光の朝日が差している。

前句の「霜の草ね」(霜が降りた草の根)に、それが生えている「庭の面」を付けた。  
寄合  
松トアラバ 松は山にも裏にも庭にもいづくにもある物也。(連珠合璧集三二九)  
季―秋(すさまじ)

36

嵐に池の浪白き色

宣滋

一方では庭の面に冷たい光の朝日が当たり、もう一方では庭の池に嵐のせいで冷たい白色の浪が立った。

前句の「影冷じき」(光が冷たい)に「浪白き色」(浪の冷たい白色)と付けた。ただし、前句の「庭」に「池」と付けたとも言える。  
寄合  
庭 付合ニハ…池…  
(竹葉集五〇三)

どがある。

二 「波白き」と詠む歌の例に「波白きうらわの松の葉ごしよりかくれあらはれ見ゆる釣船」(延文百首・一九三・進子内親王)、「波白き川瀬の月は影ふけて水上遠く水鶏鳴くなり」(拾塵集・一九五)。

一 歌例に「茂かりしよもぎのかきのへだてにもさはらぬ物は冬にざりけり」(夫木抄・一五〇一八・曾禰好忠)、「茂かりし萩の藪こそ恋しけれしかばかりだに我が宿はなし」(赤染衛門集・五六三)など。

二 「汀の藻屑」を詠む歌に「玉藻かる池の汀の菖蒲草ひくべき程に成りにけるかな」(続詞花集・夏・一三三・堀川院)、「世とともにしをるる袖や衣川は汀に寄する藻屑なるらん」(関白内大臣歌合・五一・源雅光)などがある。

三 「散る花は浮き草ながらかたよりて池のみさびに蛙なくなり」(風雅集・春下・二五四・前参議為実)、「風吹けば池の浮き草かたよりに又影さわぐ春の藤波」(草根集・一八二七)。

一 歌例に「里遠み作る山田のみもりすとたてるそほづに身をぞなしつる」(夫木抄・一〇一三七・曾禰好忠)、「五月雨のふるのわき田もつくるなり民うるほへる御代にあひつつ」(洞院撰政治家百首・四五

季―無季

37 茂<sup>一</sup>かりし汀<sup>二</sup>の藻屑<sup>三</sup>かた寄りて 重信

嵐のためにたくさん茂っていた池の汀の藻屑がかたよってしまった。

38 作<sup>一</sup>る田<sup>二</sup>中の流れ<sup>三</sup>はるけき 貞重

藻屑が偏って田水の流れを塞いでしまったが、田作りをしているうちにそれが取り除かれ、田の中から遙か遠くまで水がながれていく。

前句の「池」に付合語の「水草」を「藻屑」に変えて付けた。なお、「かたよりて」は次に挙げる『永久百首』五四五の「水草かたよる」による。

池 付合ニハ…水の流…水草…  
〔証歌〕吹く風に水草かたよる池水はなかばくもれる かがみなるらん(永久百首・五四五・源兼昌)  
(竹馬集四七三)

季―夏か? (茂る)

前句の「汀」に「流」と付けた。なお、「みぎは」と「ながれ」が共に出てくる歌に「なにはえやながれて早き夕塩にみぎはのあしのかたなびきなる」(宝路百首・三四九一・藤原資季)がある。

季―夏(作る田)

四・三位範宗) などがある

二「田中」の歌例に「咲きにけり  
苗代水にかけ見えて田中のみどの  
山ぶきの花」(続古今集・春下・一  
六四・待賢門院堀河)、「白露のお  
くてのおしねうちなびき田中の井  
どに秋風ぞ吹く」(同前・秋下・四  
五七・西園寺公経) など。

三「流はるけき」は流れが遙か遠  
くまで続くこと。近い用例として  
「遙かなる湊の潮のながれ江に芦  
の葉寒くこほる浦風」(夫木抄・一  
三四一一・藤原為氏) がある。ま  
た、文禄四(一五九五)年七月二  
十一日興行の百韻に「こほるもや  
舟さす棹に砕くらむ／明け離れた  
る流れはるけし」(七／八) がある。

一「五月雨も限り有」は「五月雨  
は限りなく降り続けるわけではな  
い、降ったりやんだりを繰り返す」  
の意。歌例に「限あれば衣ほすら  
し五月雨はけふを晴間の天のかぐ  
山」(続草庵集・一四五)、「五月  
雨は伏見の田ゐに水こえて庭まで  
つづく宇治の川なみ」(夫木抄・一  
〇一六八・藤原隆信)、「限りあら  
ば雲もへだててじみな月の照る日に  
あかき五月雨の空」(柏玉集・五一  
九) などがある。

二「晴れぬらん」の歌例に「春の  
夜のかすみや空に晴れぬらんおぼ  
ろげならぬ月のさやけき」(新後撰  
・釈教・六二七・源兼氏)、「七夕

39

五月雨も限り有てや晴れぬらん

田の水は限りなく流れていくが、五月雨  
には限りがあるので、やがて晴れるだろう。

玄陳

前句の「流はるけき」に「限り有てや」と付けた。た  
だし、「田」に「五月雨」と付けたと見ることできる。

寄合

田 付合二八 五月雨：

(竹馬集五六九)

季一夏(五月雨)

の心やこよひ晴れぬらん雲こそな  
けれ星合の空」（夫木抄・慈鎮・四  
〇二八）などがある。

一 「月」と「めづらし」を結ぶ歌  
例に「五月雨の月かさなれり郭公  
めづらしからで今年だに鳴け」（万  
代集・七〇一・能因）、「めづらし  
や月に月こそやどりけれ雲の空  
よたちな隠しそ」（建礼門院右京大  
夫集・一三〇）などがある。

二 歌例に「つれもなき別はしら  
じ郭公なに有明の月に鳴くらん」  
（続拾遺集・雑春・五四五・徳大  
寺入道前太政大臣女）、「おとづれ  
てほど降る宿の時鳥鳴く一声のめ  
づらしきかな」（元良親王集・九〇）  
などがある。

一 まさしく今宵こそ、の意。歌  
の例に「今宵しも隈なく照す月影  
は残の菊を見よとなるべし」（栄花  
物語・三六八・源師房）、「さぞな  
げに思ひわぶらん今宵しもかごと  
がましく月ぞさやけき」（源家長日  
記・一四）など。

二 京都市左京区にある鞍馬山の  
古名。単に暗い山を指すこともあ  
る。歌例に「わがきつる方も知ら  
れずくらぶ山木々の木の葉の散る  
とまがふに」（古今集・秋下・二九  
五・藤原敏行）、「君がねにくらぶ  
の山の時鳥いづれあだなる声まさ  
るらん」（後撰集・恋四・八六七・

40 月にめづらし鳴く郭公

五月雨が一時やんで月を見ていたら、め  
づらしいことにほととぎすが鳴いている。

昌俊

前句の「五月雨」に「郭公」と付けた。  
寄合

五月雨トアラバ：月はつ れなき：郭公：

（連珠合璧集三六）

季―夏（郭公）

41 今宵しもくらぶの山に旅ねして

月も出ているし、めづらしくほととぎす  
も鳴いている今宵こそ、くらぶの山の暗い  
中で旅の一夜を過ごすのだ。

昌琢

前句の「郭公」に「山」を付けた。なお、「郭公」と「く  
らぶの山」が共に出てくる歌に「君がねにくらぶの山  
の郭公いづれあだなる声まさるらん」（後撰集・恋四・  
八六七・よみ人しらず）がある。  
寄合

郭公トアラバ：山：

〔証歌〕今朝きなきいまだ旅なる郭公花橋に宿はか  
らなん（古今集・一四一・夏・よみ人しらず）、聞かず  
ともこゝをせにせん郭公山田の原の杉の村立（新古今  
集・夏・二一七・西行）  
（連珠合璧集三六四）

季―無季

よみ人しらず) などがある。  
三 山に旅寝をするさまを詠む歌に「更科や姨捨山に旅寝して今宵の月を昔見しかな」(新勅撰集・秋下・二八二・能因) などがある。

一 花につらい目を見せる、の意。「花」と「うき目」を結ぶ歌例に「ありへての後をば知らず桜花ちりてぞ人にうき目見えける」(新葉集・春下・一四三・後醍醐天皇)、「散り残るこの一枝の花にさへうき目な見せそ春の山風」(檜葉集・八一・徹寛) などがある。  
二 谷から山に向かつて吹く風。歌例に「谷風に春知り初めて鶯も打ちいづる波の花になくなり」(慶運法印集・八)、「谷風にとくる氷のひまごとに打ちいづる浪や春のはつ花」(古今集・春上・一二・源当純) などがある。

一 「藤波のなどては」の「など」は、なぜ、どうしての意。歌例に「藤波の盛りは過ぎぬあし引の山時鳥などかき鳴かぬ」(続千載集・雑体・七〇八・よみ人しらず)、「藤波のかざしによりし面影のなどで春にも立ち別るらん」(弁内侍集・二二二) がある。  
二 「藤波が松に懸る」とする歌は「春風は吹くとも見えて高砂の松の梢にかかる藤浪」(新後撰集・春下・一四八・平忠盛)、「きしなく

42 花に憂き目を見する谷風

昌胤

寒くて暗いくらぶの山で花が咲いているに気づいた。自分たちにつらい思いをさせているだけでなく、花にまで憂き目を見せようとしているのだろうか、谷から吹き上げる風は。

43 藤浪のなどては松に懸るらん

宗順

どうして本物の浪を松に懸けさせないで、藤の花に松に懸かるといふ憂き目を見させるのだろうか。

前句の「くらぶの山」に「程もなき夢にまぎるな春の夜のくらぶの山の花のやどりは」(雪玉集・五七三六)から「花」と付けた。

寄合

山トアラバ 嶺とも谷とも 山類のよりきたれるを付べし。(連珠合璧集七八)

季一春(花)

前句の「花」を「藤」の花と取りなし、「うき目を見する」に「などては」と付けた。すなわち、松に懸かることは藤の花にとつては憂き目を見ることがであると解釈するのである。なお、松に懸かる藤の花の歌に「みどりなる松にかかれる藤なれどおのがころとぞ花は咲きける」(新古今集・春下・一六六・紀貫之) がある。

寄合

花トアラバ 春の植物には 梅・柳・藤・櫻など有便。…(連珠合璧集三〇七)

季一春(藤浪)

てふぢののむらの藤浪は松の木ずゑにかかるなりけり」(夫木抄・一四八四六・藤原道経)など多数見出せる。また、「松」と「浪」とが出でくる歌に「契りなきかたみに袖をしぼりつつ末の松山浪越さじとは」(後拾遺集・恋四・七七〇・清原元輔)などがある。

一「水」と「霞」を結ぶ歌例に「春きてはみでこす波の音ばかり霞に残る山川の水」(夫木抄・五五三・西園寺公経)、「川岸や柳のかげもうち霞みめぐむか水の淀の若こも」(草根集・二七九〇)などがある。  
二「よどむ」と「岸」を結ぶ歌例に「苔ふかき岩にやしはし淀むらん吉野の川の岸の浮波」(宝治百首・三六三五・弁内侍)、「岸かげの水の淀みのかた淵につりを垂れたる青柳の糸」(新撰和歌六帖・二三四八・九条知家)などがある。

一 春雨に当たって何かが朽ちてゆくことを詠んだ歌の例に「草も木も色づきわたる春雨に朽ちのみまさるふぢの衣手」(玉葉集・雑四・二三〇一・藤原公任)、「春雨に霞の袖や朽ちぬらんはるればたえてすめる夜の月」(松下集・二七〇一)などがある。  
二「かたわれ舟」は朽ち腐つたりして割れてしまった舟。歌例に「うきしづむ世をうら風の契かなかた

44 水は霞によどむ岸かげ

霞がかかって水がよどんでいるのは、藤浪が松に懸かっている姿が岸陰の水に映っているからだ。

行生

前句の「藤浪」に、「これもまた神やうゑけん住吉の松にかかれる岸の藤浪」(新統古今集・春下・二〇六・前大僧正禅守)、「おきつ風ふけどふかねど住吉の松にかけこす岸の藤浪」(宝治百首・七四八・源行家)などから、「岸」と付けた。  
季―春(かすみ)

45 春雨にかたわれ小舟猶朽ちて

春雨が降り止まないいで、岸陰に繋がれている片割れ小舟が更に朽ちてしまった。

玄的

前句の「岸かげ」に、そこに繋がれている「かたわれ小舟」を付けた。「岸」と「舟」とは次の為家や俊頼の歌にあるように、縁語。  
「五月雨は岸の上手に船つけてなぎさをみをよどの河水」(夫木抄・三〇四九・藤原為家)、「うたの島岸のしたには音信れて舟にはのりの声ぞきこゆる」(同前・一〇五〇八・源俊頼)

寄合  
岸 句作 …きし陰…  
付合ニハ…つなぐ舟…  
(竹馬集四七八)

われ小船かなたこなたに」（心敬集・一八〇）、「浮き草はおなじ汀にただよひてかたわれ舟ぞなかばしづめる」（通勝集・九四七）などがある。

一 「竹の落葉」は初夏に竹から落ちる葉のこと。歌例に「この里は柴こる山の遠ければ竹の落葉をかかぬ日ぞなき」（宝治百首・三三四七・隆祐）、「いつの間に変わるものとも見えなくに竹の落ち葉ぞ庭につもれる」（延文百首・七九四・覚誉）など。

二 「そよぐ」と「さびし」を結んだ歌例に「人は来ずさびしかれとや萩の葉のそよぐばかりの秋の山里」（千五百番歌合・一二四八・藤原隆信）、「寂しさは中々よそにききなしてそよぐも知らぬ軒の下萩」（黄葉集・七五四・鳥丸光広）などがある。「落葉又は竹の葉がさびし」とする歌には「寂しさは猶残りけり跡絶ゆる落葉が上に今朝は初雪」（無名抄・四三）、「山の名の竹の葉わくる風の音もさびしささぞな深草の里」（雪玉集・二二六九）などがある。

一 「冬ざれ」は風物が荒れはててもの寂しい冬の様を言う。歌例に「冬ざれのあさぢがうへに置く霜の消ゆる雫はたるひなりけり」（玄玉集・三二七・惟宗広言）、「冬ざ

46 政直 竹の落葉のそよぎ淋しき

かたわれ小舟が朽ちてゆくのも淋しいものだが、春雨が片割れ小舟に当たってそのそばの竹の落ち葉がそよいでいるのは、なんと物悲しい。

季―春（春雨）

前句の「朽て」に「落葉」と付けた。「朽つ」と「落葉」は、「をかのべのならの落葉や朽ちぬらんいまは音せでふる霰かな」（続千載・冬・六四七・忠房親王）、「いたづらに落葉朽ちにし山里は雪にも跡をまたでふるかな」（洞院百首・九四六・藤原行能）にあるように、「朽つ」と「落葉」は縁語。

「竹の落葉」は、初夏の季語として使われることが多いが、前句の「春雨」の続きなので、本句では晩春の気分であろう。

季―春（竹の落葉）

47 冬ざれは人氣まれなる庵の前

竹の落葉の積み重なる物寂しい冬ざれの季節に、人氣も稀な庵の前であることよ。

宣滋

前句の「竹の落葉」に、竹垣に囲まれている「庵」を付けた。「竹」と「庵」が共に出てくる歌に「庭の松めぐれる竹をかきほにて風のみたえぬ山かげの庵」（新統古今集・雑中・一八四二・源重資）、「竹をのみ友に思ひし我が庵になれてぞきなく鶯の声」（草庵集・一九）

れの枯野を寒みかる人も嵐にのこる萱がした折」(永享百首・貞成親王・五八〇)など。

二 人の気配のこと。歌例に「庭草に秋風たつを松虫の人げありとや啼きとまるらん」(草根集・三五五八)、「匂ひこそ猶もりいづれも屋のみす動きだにせぬおくの人氣に」(同・八一五六)など。俳諧の例に「飼猫がかけのぼりたる肴棚／台所には人氣稀なる」(正章千句・二五七／二五八)がある。

一 「荒田」は春耕前の、まだ耕していない田。歌例に「ますげおふる荒田に水をまかすればうれしがほにも鳴く蛙かな」(西行法師家集・一二六)、「たづのなく冬の荒田のうねの野に一村すすき一夜宿かせ」(壬二集・一五一七・藤原家隆)などがある。

二 荒田の原に住みなれた鳥、の意。「馴る」を用いた歌に「住馴るとここを雲雀のあくがれて行へもしらぬ雲に入りぬる」(夫木抄・一八五〇・藤原有家)、「まだ馴れぬ大内山の時鳥今年初音を聞きぞそめつる」(続後拾集・夏・一七九・尊良親王)などがある。

三 歌例に「鳥の音もみつの御法をきかすなり山の庵の明がたの空」(壬二集・四九一・藤原家隆)、「相坂の鳥の音遠く成りにけり朝露わくる粟津のの原」(新拾遺集・羈旅

48 信助 荒田の原に馴るる鳥の音

一 庵の前の春耕を待つ荒田の原に飼い馴らされた鳥の音が聞こえる。蘇武に飼われていた雁のように、いざというときは飼い主の消息を方々に知らせてくれるだろう。

がある。

季―冬(冬ざれ)

本句は蘇武に飼い馴らされた雁が都まで彼の便りを届けたという中国の故事に基づく「すきかへす春の荒田はすむ程の水さへなしと雁や行くらむ」(草根集・一六二五)を本歌にしていると思われる。ただし、百人一首一番歌などにあるように、「庵」と「田」は縁語なので、前句の「庵」に「荒田」と付けたと見ることも可能である。

季―冬(荒田)

・七七七・頓阿) などがある。

一 歌例に「山ぎはの霧はれそめて声ばかりききつる雁のつらぞ見え行く」(玉葉集・秋上・六〇〇・藤原実文)、「雲とほき夕日のあとの山ぎはに行くとも見えぬ雁のひとつら」(風雅集・秋中・五三九・伏見院) などがある。

二 歌例に「夕日かけほのかにみゆる片岡の尾花が末に秋風ぞ吹く」(文保三年御百首・八三八・藤原師信)、「ほのかなる野沢の夕日かげるふの燃ゆるは春の草葉なりけり」(柏玉集・二〇五) などがある。  
三「残るらん」は「残るだろう」の意。歌例に「なが月もすゑの野原の花薄ほのかに残る秋の色かな」(続千載・秋下・五六九・平時敦)、「風にゆく峰のうき雲跡はれて夕日に残る秋のむら雨」(玉葉集・秋下・七二七・平時春) など。

一 近い例に「住吉のちぎのかたそぎゆきもあはで霜置きまよふ冬はきにけり」(新後拾遺集・冬・四八四・源俊頼)、「置あへぬ朝の霜の薄紅葉 消て色とる木々の白露」(下葉集・二八二) がある。  
二「野べの裏枯れ」の歌例に「野べの色は思ひしよりもうら枯れて霜をうらむるきりぎりすかな」(後鳥羽院御集・三五四)、「けさみれば草葉も白く霜置きて野べのけし

49 山際や夕日ほのかに残るらん

一 豊 一 荒田の原に人に馴れた鳥がいて、そのそばの山際に夕日がほのかに残っているであろう。

前句の「荒田の原を「浅茅が原」と取りなし、「夕日さす浅茅が原の旅人はあはれ幾夜に宿をかるらん」(新古今集・羈旅・九五一・源経信) から「夕日」と付けた。季―無季

50 霜置きあへぬ野辺の裏枯れ

一 順息 山際に夕日が残っていてまだ寒くないので、霜が置き尽くしていかない野辺の草が早くも裏枯れてきた。

前句の「山際」にそこに続く「野辺」を付けた。48の「荒田の原」に通じるので、所謂観音開きの嫌いがある。

「山際」の山と野辺がともに出てくる歌に「山里のかさねは雪にうづもれて野べとひとつに成りにけるかな」(千載集・冬・四五七・藤原実定)、「をちこちの山は桜の花ざかり野べは霞にうぐひすの声」(玉葉集・春下・一四八・永福門院) などがある。

寄合

麓トアラバ：野べ：(連珠合璧集八五)

きはうら枯れにけり」(宝治百首・二〇九六・花山院師繼)など。

一 「野辺に吹く松風」の歌としては下段の寂身の歌のほかに「桜狩かりねの夢も見し花もまぎれて明くる野辺の松風」(心敬集・三四〇)などがある。

二 歌例に「尋ねゆく梅は木陰もたどられす句ひやひかり春の夜の空」(拾塵集・四〇)がある。また、文明一五(一四八三)年興行の『文明十五年千句 第五』に「賑わふうちの家々の月／戸ざしせぬ秋の夜空にうち向かひ」(六四／六五)がある。

三 「いつもみる月ぞと思へど秋の夜はいかなるかげを添ふるなるらん」(後拾遺集・秋上・二五六・藤原長能)、「涼しさはいきの松原まさるともそふる扇の風な忘れそ」(新古今集・離別・八六八・枇杷皇太后宮)などがある。

四 仮寝のこと。歌例に「ふし侘びぬしののをささのかり枕はかなの露や一夜ばかりに」(新古今集・羈旅・九六一・藤原有家)、「いはしろやかやが下ねのかり枕松風さむみいも夢に見ゆ」(師兼千首・八九一)など。

一 「砂ね」は「磯根」のことか。「磯根」は、磯のほとり、磯辺。歌例に「沖津渦いそねに近き岩枕

51 松風の夜空をそふるかり枕

霜が置き始めた野辺に冷たい松風の吹く夜空が加わっている。旅の仮寝の身に。

政直

季―冬(霜)

前句の「野辺」に、「旅人の夢の枕はたえはてて霜ふきむすぶ野辺の松風」(寂身法師集・二六〇)などの歌例のように「松風」と付けた。なお、「夜空」を用いた歌例、句例は少ない。当時としては新しい表現だったのかも知れない。

季―無季

52 砂ねまどをの衣うつ音

磯辺を吹く松風に乗って、織り目の粗い

玄的

前句の「松風」に、「松風の音だに秋はさびしきに衣うつなり玉川のさと」(千載集・秋下・三四〇・源俊頼)から「衣うつ音」を付けた。

かけぬ波にも袖はぬれけり」(夫木抄・一九五二・源光行)、「田子の浦に藤さきぬらし磯根松梢そめゆく紫の浪」(拾玉集・二三一三)などがある。

二 織り目や編み目のあらいさまを言う。ここでは砧で衣を打つ音の間隔が長いことを掛ける。歌例に「須磨の海人の塩焼衣の藤衣間遠にしあればいまだ着なれず」(万葉集・卷三・四一三・大綱公人主)、「須磨のあまのまどをの衣夜や寒き浦風ながら月もたまらず」(新勅撰集・秋上・二七二・藤原家隆)、「須磨のあまの塩焼衣をさをあらみまどほにあれや君がきまさぬ」(古今・恋五・七五八・よみ人しらず)など。

三 「衣打つ音」は李白「子夜呉歌」の「長安一片月 萬戸擣衣聲」に拠る。歌例に「御吉野の山の秋風さよふけて古郷寒く衣うつなり」(新古今集・秋下・四八三・藤原雅経)、「袖の上の露も乱るる秋風に誰かしのぶの衣うつらむ」(続千載集・秋下・五五八・大蔵卿隆博)などがある。

一 「月影もふけゆく」とする歌に「月かげは山の端いづる宵よりもふけゆく空ぞ照りまさりける」(後拾遺集・雑一・八三七・藤原長房)、「月かげのはつ秋風とふけゆけば心づくしに物をこそ思へ」(新

布を打つ音が間遠に聞こえてくる。

季―秋(衣打つ)

53 月影も更け行く須磨の浦かなし

貞重

衣を打つ音が聞こえ、月影の夜も更けてゆく。そんな須磨の浦のもの悲しい情景であることだ。

前句の「衣うつ」に、「おきあかす露さへさむき月影になれていく夜か衣うつらん」(続拾遺・秋下・三三四・入道二品親王性助)、「たれゆゑかかたぶくまでの月影にねなまし人の衣うつらん」(続千載・秋下・五五五・源邦長)などから、「月影」と付けた。

古今集・秋上・三八一・円融院）  
などがある。更に「須磨」まで詠  
み込んだ歌としては「須磨の関ふ  
けゆく波のうき枕ともなふ月ぞう  
らづたひぬる」（秋篠月清集・一一  
八七・藤原良経）、「関守よ更行く  
月もとどめなん須磨のうらぢの秋  
の夜の空」（永享百首・四六六・浄  
喜）、「須磨の浦に待つ夜ふけゆく  
月かけを浪のあだ名に誰をしむら  
ん」（後鳥羽御集・四九三）などが  
ある。

二 「うら悲し」を掛ける。歌例  
に「行舟のうきて思ひもおほしま  
の 浦かなしきは秋の夕くれ」（雪  
玉集・一一四〇）、「さ夜深けてあ  
しの末こす浜風にうらがなくも  
鳴く千鳥かな」（続千載集・冬・六  
三一・藤原公能）など。

一 涙は知っているだろうか、の  
意。歌例に「袖にしも月かかれと  
は契りおかず涙は知るやうつ山  
ごえ」（新古今集・羈旅・九八三・  
鴨長明）、「いきてよにいつまでぬ  
れん袂ぞと涙は知るや秋の夕ぐれ」  
（続古今集・恋五・一三四一・西  
園寺実氏）などがある。

二 この言い回しの歌例は見いだ  
せない。「かかる」を用いた歌の例  
に「思ひきやかかる恋路に入りそ  
めてよくかたもなき歎きせんとは」  
（山家集・一三三二）、「頼めねば  
来ぬをうしとはかこたねどかかる

54 涙は知るやかかかるひとり寝  
須磨の浦のもの悲しい景色を見て流した  
涙はこのような独り寝の一夜を知っている  
か。

昌琢

寄合

衣打トアラバ 月影

（連珠合璧集六六七）

季一秋（月影）

前句の「かなし」に、「わびはつる時さへ物の悲しきは  
いづこをしのぶ涙なるらむ」（古今集・恋五・八一三・  
よみ人しらず）、「ちりぢりにわかるるけふのかなしさに  
涙しもこそとまらざりけれ」（千載集・哀傷・五七九  
・上西門院兵衛）などにより、「涙」と付けた。

季一無季

月夜をひとり見よとや」(風雅集・恋二・一〇八〇・前太宰大貳俊兼)、「独りきく枕もさびし秋の雨のきりのひろ葉にかかる寢覚は」(挙白集・七二五)などがある。

一 取るに足りない我が身のほど。

歌例に「花がたみめならぶ人のあまたあれば忘れぬらむ数ならぬ身は」(古今集・恋五・七五四・よみ人しらず)、「うき世とも中々いはじひたすらに数ならぬ身はあるに任せて」(新千載集・雜七・一九四五・宋親)などがある。

二「又人に」の歌例に「うきをしたふ心ながさを又人に思ひくらべてあはれとを知れ」(玉葉集・恋五・一七七・藤原経親)、「こしかたの忘れがたきもまた人に語るばかりの思ひ出はなし」(風雅集・雜下・一九二八・後宇多宰相典侍)などがある。

三「見えがたみ」の「み」は、「・なので」の意。この歌例は見いだせないが、「問ひがたみ」の例に下段に挙げた古今集・七〇五がある。また、「めずらしみ」の例に「望月のいやめづらしみ思ほしし君と時々幸して」(万葉集・卷一・一九六・柿本人麻呂)がある。

一 あれこれ思ったり思わなかったりしているうちに思い定めるのが遅れた、の意。具体的には、「つ

55 数ならぬ身はまた人に見えがた  
み 昌俊  
ぬ 涙に暮れながら独り寝をしている数ならぬ自分は、やはりまた人の目には見えがたいのであろう。

前句の「涙」に、「とはぬまはそでくちぬべしかずならぬ身よりあまれる涙こぼれて」(続後撰集・恋四・九五・馬内侍)、「数ならぬ身をする袖の涙とも月よりはたれかとふべき」(新後拾遺集・秋下・三八一・法眼慶融)などにより、「数ならぬ身は」を付けた。さらに、「かず／＼に思ひおもはず問ひがたみ身をする雨は降りぞまされる」(古今集・恋四・七〇五・在原業平)を本歌として句を作った。

季―無季

56

一 おも  
思ふにおくれつらき存命  
二 (ながらへ)  
玄陳  
数ならぬ身の上なので、出家しようとい

前句の本歌として挙げた古今集・七〇五の「数々に思ひおもはず」を「何回も思ったり思わなかったり」と取り、そうしているうちに「思ふにおくれ」た、と付

らき存命」と続くので、「出家の決心が遅れた」ことを指すと思われる。歌例に「人のよの思ふにかなふものならばわが身は君におくれざらまし」(兼輔集・一一三)、「思ふには遅れんものかあらくまのすむてふ山のしばしなりとも」(拾遺愚草・七六七)などがある。

二 生きながらえるのがつらい、の意。歌例に「ながらへばつらき心もかはるやと定めなき世を頼むばかりぞ」(千載集・恋一・六七九・藤原頼輔)、「いつはりを頼むばかりにながらへばつらきぞ人の命なるべき」(続古今集・恋四・一二七七・藤原通成)などがある。

一 自分より早く出家した人の跡を慕って、の意であろう。この意味と同じではないが、「跡をしたふ」を用いた歌に、「さらに又立ちおくれじとしたふかなもえし煙の跡を尋ねて」(新拾遺集・哀傷・八八〇・従三位吉子)、「跡したふかたみの日かずそれだにも昨日の夢に又うつりぬる」(風雅集・雑下・一九九二・冷泉爲相)などがある。

二 「世を捨てばやの山の奥」は「先達の跡を慕って」世を捨てればよかった、山の奥で」の意であろう。似た言い回しを用いた歌に「世をすてて山にいる人山にても猶うき時はいづちゆくらむ」(古今集・雑下・九五六・凡河内躬恒)、「世を

う思いも決心がつかず、つらい残生を送っている。

季―無季

57

一 跡したひ世を捨てばやの山の奥

行生

二 早々と出家された人の跡を慕って自分も世を捨てたいものだ、山の奥で。

前句が早く出家しなかったのを後悔しているという内容だったので、早々と出家した人の跡を慕って世を捨てればよかったと付けた。

季―無季

すてば我も入るべき山の端にまづ  
かくれぬる夜半の月かな」(玄玉集  
・二一四・平康頼) などがある。

一「すべてのことが嫌になる、の  
意であろう。「なべて」と「うとむ」  
が共に出てくる歌例は見いだせな  
いが、「なべて」と「うと(し)」  
が共に用いられた歌に「わきて見  
むなべての春はうとけれどそのか  
み山の花の香ぞする」(長綱集・三  
八九)がある。

二「君くらき時」の歌例は見いだ  
せないが、連歌の例に「世を恨み  
ての隠れ家の山／君くらき心にと  
きを失ひて(毛利千句・三四／三  
五)がある。

一「もえし」は「火葬」で遺体が  
燃やされたこと。この意味で「も  
えし」を用いた例として、下段に  
挙げた新古今集・八二二のほかは、  
「残りゐて思ふもかなしあはれな  
どもえし煙に立ちおくれけん」(風  
雅集・雑下・一九九七・永陽門院  
左京大夫)、「うしと見し春もめわ  
たる鳥辺山もえし煙や霞みきぬら  
ん」(草根集・一三九)などがある。  
二「こころ」は「数多く」の意。  
歌例に「世の中はいかに苦しと思  
ふらむこころの人にうらみらるれ  
ば」(古今集・雑躰・一〇六二・在  
原元方)がある。ただし、「こころ  
の文」の歌例、俳諧の例は見出せ

58 なべてうとむや君くらき時

世の中のことすべてがいやになって、世  
を捨てるのだろうか。お仕えする方が亡く  
なられ、暗い煙となって天に昇られる時は。

慶順

59 燃えしこそこころの文の煙なれ

燃えしまったのは、ほかでもなく、あな  
たからいたただいたたくさんの文で、これが  
煙となつていているのだ。

昌塚

「後朱雀院かくれ給ひて源三位がもとに遣はしける」  
という詞書のある「あはれ君いかなる野べの煙にてむ  
なしき空の雲となりけん」(新古今集・哀傷・八二一・  
弁乳母)が本歌。本句の「君くらき時」は弁乳母が仕  
えていた「君」すなわち後朱雀院が亡くなり、空の黒  
雲のような黒い火葬の煙となつてしまったことを述べ  
ていると思われる。

寄合

世をすつるには：君くらき …… (捨花集二四六)

季―無季

前句の「お仕えする方の遺体が燃やされて暗い煙とな  
つて立ち昇る時」の意の「君くらき時」に「もえし」(燃  
えし)と付けた。  
前句との関係で「おもへ君もえし煙にまがひなで立ち  
おくれたる春のかすみを」(新古今集・哀傷・八二二・  
源三位)を下敷きにしてている。ただし、遺体ではなく  
文が燃やされているとした。

季―無季

ない。連歌では、永祿元（一五五八）興行の何船百韻に「恨みのみつもれる仲のはてはてに／ここの文の煙はかなや」（六五／六六）がある。

三文を燃やした時の煙についても、歌例、俳諧の例は見出せない。連歌の用例としては、前掲の連歌例のほかに、天文六（一五三七）年興行の『伊予千句 第七』に「とりあつめ古へ今の我が涙／煙になせる文のあはれさ」（三七／三八）とある。

一「仏のとける法」の歌例に「思いで煙やまさんなき人の仏になれるこのみみば君」（後撰集・雑三・一二二六・真延法師）、「うへもなき仏のとける法なればまされる教へさらになきなり」（安撰和歌集・三八一・権律師実厳）、「誰か世にたもたさるへき仏に まもり思ふととける御法を」（草根集・五三九〇）など。

二「法」と「妙なる」を結ぶ歌例に「妙なりと知ることわりのます鏡つくりおきける法もかしこし」（続後拾遺集・积教・一三〇八・前僧正実聡）、「ここにのみありとやを見るいづくにも妙なる声に法をこそ聞け」（風雅集・积教・二〇五七・赤染衛門）など。

一「罪おもき身」の歌例には「塵

60

一 仏のとける法ぞ妙なる

数多の文（書物）の中でも御仏がお説きくださった法の道を記した書物が素晴らしい内容を伝えていく。

昌俔

前句の「煙」に「白妙の山はふじのね時しらぬいく世の雪に煙たつらん」（建保名所百首・九八六）から「妙なる」と付けた。  
季―無季

61

一 罪おもき身も彼国や頼むらん

前句の「仏」に「彼国」と付けた。なお、「仏」と「彼

と聞くばかりにかけける露の身のかるく覚ゆる罪重きかな」(匡衡集・三二)、「罪は世に重き物ぞと聞きしかどいとかばかりは思はざりしを」(赤染衛門集・二六七)など。なお、「罪おもき身」は『源氏物語』「須磨」の光源氏の境遇を背景にした表現。

二 仏の国。歌例に「西ふけば人の心も涼しきや彼国よりの秋のはつ風」(草根集・三二八二)など。  
三 歌例に「思ひ立つ鳥は古巢も頼むらんなれぬる花の跡の夕暮」(新古今集・春下・一五四・寂蓮法師)などがある。

一 「海辺」を詠む歌の例に「行く汐か緑は染むる海辺なるなびく柳のうき島が原」(夫木抄・八七一・前大納言顕朝)、「千鳥鳴く海辺に月をひとり見て都のほかに年の暮れぬる」(能因法師集・二二六)などがある。  
二 住みづらくない、の意。「住吉」を連想させる。関連する歌に「煙ぞ見る春の海辺の名なりけり住吉の里住よしの浜」(夫木抄・一七一四・藤原定家)など。

一 「そのかみの」の歌例は「そのかみの人はのこらじはこぎきの松ばかりこそわれをしるらめ」(後拾遺集・雑五・一一二九・中将尼)、「そのかみの玉のかざしをうちか

御仏の説かれる法の道からはずれて重い罪を負っている我が身も、かの御仏の国に行けるようにお頼みするとしよう。

順息

「国」が共に出てくる歌に「彼国にむまれて後や様々の仏の法も我そとかまし」(言綱卿詠草・二二二六)がある。寄合

佛トアラバ、彼国(連珠合璧集五七二)

季―無季

62 海辺も住ばすみは憂からぬ  
信助  
罪重い身でも海辺に住んでみると住むのがつらいということはない。

前句の「彼国」に「海辺」と付けた。「海辺」に続く「住ば」の「住(すま)」は「須磨」の掛詞となっているので、「海辺」は光源氏が侘び住まいをした須磨の海辺でもある。

季―無季

63 そのかみの都はさぞな難波潟  
宣滋  
海辺と言えば、大昔の難波潟のそばの都はさぞ立派だったことであろう。

前句の「海辺」に「難波潟」と付けた。  
季―無季

へし今は衣のうらをたのまん」(新古今集・雑下・一七一二・東三条院)など多数。「そのかみの都」と連用した歌例、句例、連歌の用例は本句以外見いだせない。

二「都はさぞな」は「都はさぞかし」の意。歌例に「こしぢには都の秋のこちしてさぞな待らむ春のかりがね」(新後撰集・羈旅・六〇四・権中納言公雄)、「都だにさぞなさびしき松の風ひとりみ山にたれしのぶらむ」(後鳥羽院御集・一二二五)など。

三「難波潟」の歌例は「難波潟こやのかりねの夢にだに都をいかでみつのうらかぜ」(草庵集・一三三〇)、「難波潟月の宮こに都をもならべて見ばや照す夜の影」(松下集・七〇三)など多数見られる。

一「よせ来る波」を用いた歌の例に「難波がたよせくる波に風寒えてあしの枯葉にたるひすがれり」(正治初度百首・五六一・源通親)、「わたの原よせくる浪のしぼしぼも見まくのほしき玉津島かも」(古今集・雑上・九一二・よみ人しらず)などがある。

二「舟あまた」の歌例に「蘆ふかきこやのたはれめ立出でよみしま江口に舟あまたみゆ」(草根集・一〇二一七)などがある。

一「遠近」の歌例に「遠近も同じ

65

遠近も明けて静まる山嵐

前句まで海の句が続いたので、海辺に向かって吹く山

64

よせ来る波の舟あまた也

玄的

前句の「難波潟」に「よせ来る波」と付けた。

難波潟に寄せ来る波があまたの舟を揺らしている。

季―無季

盛りになりにつけりまづいづかたの花を問はまし」(新統古今集・春下・一二三・後岡屋前関白左大臣)、「波こすと見えて木末の遠近もなべて渚の松の白雪」(雪玉集・七三二九)など。

二「明てしづまる」は「(嵐などが)朝方になつて静まつてきた」の意であろう。歌例は見いだせないが、連歌の例に「園塵第一・冬」の「冬枯れの野辺の萱原むらむらに／夜半の嵐もあけて静まる」(四〇四／四〇五)などがある。

三 山から吹きおろす風。歌例に「心して稀に吹つる秋風を山風にはなさじとぞ思ふ」(後撰集・雑二・一一三八・大輔)がある。

一「雲間に白き」の歌例に「あらし山くづれておつるたきつせの雲まにしるき五月雨の比」(夫木抄・三〇三三・藤原為家)、「風まぜにちるや霰のそら冴えて雲間にしろき雪の遠山」(竹風和歌集・四〇八・宗尊親王)など。  
二「雪」と「杉むら」とが共に出てくる歌例に「しら雪のふるの山なる杉村のすぐる程なき年のくれかな」(金槐和歌集・四〇一)、「心しる人しもあらば三輪の山いかに待ちみむ雪の杉むら」(雪玉集・一七〇三)などがある。

海辺に向かつて遠いところ、近いところから吹き下ろす山風が夜明けと共に静かになった。

玄陳

風を使って、場面を切り替えた。  
季―冬(山風)

66 雲間に白き雪の杉村

政直

雪混じりの山風が吹き荒れて、雲間の向こうに白い雪を被った杉の群立ちが見える。

前句の「明て」で想起される明け方の空に「雲間」と付けた。

「杉村」は「杉群」(杉の群立ち。杉の群がり立っている所)。「杉群」を用いた歌に「逢坂や梢の花を吹くかに嵐ぞかすむ関の杉群(新古今・春下・一二九・宮内卿)

季―冬(雪)

67 雨の後花に分け入る寺の門

前句の花を思わせる「白き雪」に「花」と付けた。本

「雨の後花橘をふく風に露さへにほふゆふぐれの空」(玄玉集・六三七・藤原俊成)、「雨ののちの露にははぎのをれふして散らでも庭の花となりぬる」(拾玉集・四五三四)などがある。

二「花に分け入る」の例としては「今日もまた三輪の杉むらゆきくらし花に分入る小初瀬の山」(寂蓮法師集・一七七)、「旅人の先立つ袖も秋草の花に分入る武蔵野の原」(頓阿句題百首・三三一)などがある。

三 歌例に「墨染の夕の山の寺の門たたかぬ袖に月ぞさしくる」(草根集・八二一七)などがある。

一「鐘の音」の歌例に「更くる夜の寺おこなひの鐘の音にはかつぐみにうちぞ驚く」(新撰和歌六帖・九〇四・藤原信実)、「花にあかぬ名残を思ふ春の日の心も知らぬ鐘の音かな」(夫木抄・一五二三六・九条良経)などがある。

二「暮るる」は「春の日」が暮れることであるが、春という季節が終わることも含んでいると思われる。歌例に「いかにせん花に恨をつくしてもくるるならひの春の日数を」(文保三年御百首・一七一二・藤原実前)などがある。句例に「春の日のくるるもしらず連歌して」(玉海集・二六七三・勝政)な

春雨が降った後、先日まで降っていた白  
い雪を思わせる桜の花を分け入って寺の門  
までやってきた。

慶順

句の「雨」は春雨。前句の雪の季節を暖かくなって雨が降る季節に変えた。

季―春(花)

68

鐘の音して暮るる春の日

順息

雨がやんだ後、寺の鐘の音が鳴り響き、  
春の日が、そして春の季節も暮れようとして  
いる。

前句の「寺」に「鐘の音」と付けた。  
寄合

寺トアラ：鐘：

(連珠合璧集五七四)

季―春(春の日)

どがある。

一「朝氣」と詠む歌に「春きぬと思ひなしぬる朝げより空も霞の色になりゆく」（玉葉集・春上・五・伏見院）、「先ぞ思ふあすの朝氣の春の道遠くはゆかじ野にも山にも」（草根集・一九五三）などがある。

二 鷹狩りで使う鷹に、音を目印とするために鈴を付けた。歌例に「鈴の音はよそにもしるし箸鷹のしらふに雪はふりまがへども」（新千載集・冬・七二〇・権大納言忠季）、「はし鷹のをぶさの鈴の音に聞く狩場の御幸跡はふりつつ」（同・七二一・入道前太政大臣）など。

三「鷹が帰る野」を詠んだ歌に「はし鷹のとがりのましばふみならし帰る野原に出づる月影」（新千載集・秋上・三七六・順徳院）がある。

一 歌例に「みこしをかいくその世々に年をへて今日の御幸を待ちて見つらん」（後撰集・雑二・一一三二・枇杷左大臣）、「鶯のなきつるなへに春日野の今日の御幸を花とこそ見れ」（拾遺集・雑春・一〇四四・藤原忠房）などがある。

二 歌例に「面影の身にそふ今朝の名残こそ忘がたみのつらさなりけれ」（新千載集・恋三・一四三〇・後岡屋前関白左大臣）、「春霞かすみし空の名残さへ今日をかぎりの別なりけり」（新古今集・哀傷・

69 朝氣より鈴さす鷹の帰る野に

鐘の音が聞こえる朝方の寒気の中、鈴を差した鷹が帰ってくる野に駆けつける。

昌琢  
前句の「鐘」に「鈴さす鷹」と付けた。

寄合  
鐘 かねには：鈴さす鷹：  
（拾花集三八四）  
鐘 二ハ：鈴さす鷹：  
（竹馬集五六八）

季―冬（鷹）

70 今日の行幸の名残こそあれ

朝氣の中の鷹狩りをご覧になろうと、今朝、野の行幸があった。その行列の名残がまだ残っている。

貞重

前句の「鷹」に「行幸」と付けた。本句の行幸は鷹狩りを見るための「野行幸」のこと。これに関連する和歌に後土御門院の「今は、や野への行幸の跡たえてよそにだにみぬ鷹のふる舞」（紅塵灰集・四八〇）がある。

寄合

鷹 付合 二ハ：行幸：（竹馬集一八七）

季―無季

七六六・摂政太政大臣) など。

一 感慨深いことだ。「哀なり」を用いた歌例に「花さそふ春のあらしは秋風の身にしむよりも哀成けり」(和泉式部集続集・二一八)、「行過る程をたそとや休らひしおほよそ人の哀成しに」(赤染衛門集・二〇八)などがある。

二 京都市伏見区深草にある山。「深草山」及び「深草」の歌例に「空蟬はからを見つともなぐさめつ深草の山煙だに立て」(古今集・哀傷・八三一・勝延)、「深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりは墨染めに咲け」(同・八三二・上野岑雄)などがある。

三 歌例には「うかりける世に炭竈のうす煙たえみたえずみ物おもふころ」(夫木抄・七五六四・後鳥羽院)などがある。ただし、本句の「うすけぶり」は火葬の際のものであろう。

一 「浅茅が原」の歌例に「露むすぶ秋にははやく成りにけり浅茅が原のうつろふみれば」(続詞花集・秋上・一五四・修理大夫顕季)、「夕日さす浅茅が原の旅人はあはれいづこを宿にかるらん」(同・七六四・大納言経信)などがある。  
二 住める、と澄める、を掛ける。歌例に「鳩の海は氷らぬ浪もなかりけり千里に澄める冬の夜の月」

71 哀なり<sup>一</sup>深草山<sup>二</sup>の薄煙<sup>うすけぶり</sup>

感慨深いことだ。亡くなった人の名残りのように、深草山に火葬の薄煙が立っている。

昌俔

前句の「行幸」に「あはれなり昔の人をおもふには昨日の野辺に御ゆきせましや」(新古今集・雑上・一四三八・源雅信)により「哀なり」と付けた。  
季―無季

72 浅茅が原もまだ<sup>二</sup>すめる里<sup>一</sup>

深草山の方角は薄煙が立っているが、浅茅が原はまだ澄んでいるので、この里にまだ住むことができる。

行生

前句の「深草山」に「浅茅が原」と付けた。  
寄合  
深草  
付合ニハ：浅茅：  
〔証歌〕深草の山のすその、浅ちふに夕風寒みう  
つら なく也(続古今集・秋下・四八八・寂超法師)  
(竹馬集三三六)  
季―無季

(夫木抄・一〇三九五・光明峰寺入道撰政)、「ながむれば心のはてもなかりけり千里はるかに澄める月影」(文保三年御百首・三三四四・少将内侍)などがある。

一 「あれてだに」は「荒れてさえいても」の意。歌例に「荒れてだにあはれいく世を匂ふらんふりにし里の軒の橘」(後十輪院内府集・四二五)、「いかばかり人の心はあれてだに残れるあまの里の名ぞうき」(遠忠朝臣詠草・八三)など。

二 鶉の鳴く声が絶えないという歌例は見いだせない。「片鶉の鳴き声が寂しい」とする歌に「なを残る秋の日影の片鶉鳴き声さびし野べの夕暮」(雅世卿集・一三)がある。

三 雌雄相伴わないで、離れている鶉。秋の季語とされる。歌例に「ふか草や臥しうき床の片鶉かる人なしの身をも捨てなで」(草根集・六七七〇)、「はれも又とも寝する夜や片鶉いざ露ふかき床をくらべむ」(雪玉集・三一九八)などがある。

一 寒気、冷気などが強く感じられること。歌例に「きりぎりす鳴く声ことに身にしむはいかに聞きなすね覚なるらん」(弘長百首・二六一・藤原基家)、「われだにも身にしむ夜半の秋風にさこそは

73 荒れてだに鳴く声絶えじ片鶉 重信

浅茅が原が荒れてさえいても、鳴く声が絶えることのない片鶉なのだ。

前句の「浅茅が原」に「片鶉」を付けた。

寄合 浅茅生 句作 あさち原 付合ニハ 鶉：

(『竹馬集』五二二)

深草には 鶉：

〔証歌〕ゆふされは野への 秋風身にしみて鶉鳴くなり  
深草の里」(久安百首・八三八、千載・秋上・二五九・藤原俊成)

(随葉集二五八)

季―秋(片鶉)

74 身にしむ比に成し秋風 宣滋

秋風の冷たさが体に感じられる時期になった今日この頃、秋風が吹いている。

「ゆふされは野への秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里」がこの句の本歌。ここから、前句の「片鶉」に「身にしむ：秋風」と付けた。

季―秋(秋風)

虫の声よわるらめ」(万代・一一五七・藤原為教)などがある。

二 冷たさを感じさせる秋風の歌に「けふよりはこすのまとほる秋風も身にしむばかり成りにけるかな」(為家集・四八三)、「秋風にしたばや寒くなりぬらんこはぎが原に鶉鳴くなり」(後拾遺・秋上・三〇三・藤原通宗)など。

一 見よというなら見てみよう、の意。歌例は見いだせない。この表現を用いた俳諧の例に「鏡にて見よや見よやの果てもなし」(守武千句・七三七)、「見よや見んいつも月夜に米柳」(玉海集・三五四・徳窓)などがある。

二 同じ言い回しの歌例に「かはほりにわがはりこむる涼しさを思ふがかたの風ぞいとふな」(古今和歌六帖・三四五三・笠女郎)、「白雲のゆくべき山は定まらず思ふ方にも風はよせなん」(後撰集・恋六・一〇六五・よみ人しらず)など。

三 「空の月」の歌例に「中空の月待えてそ四方の人 にほへる花のひかりをもみる」(草根集・五四〇四)、「雲霧はなかばの空の月の名を四方にや誘ふ夜はの秋風」(後花園院御集・一六九三)などがある。

一 互いに約束しておく」の意。歌例に「有明の月よりほかに誰をかは山路の友と契りおくべき」(新

75 見よや見んおもふが方の空の月の玄的

見よと言うなら見てみよう。私が恋しく思う人たちのいる所の空に懸かっている月を。

前句の「秋の風」に「空」と付けた。  
この句の本歌は『源氏物語』「須磨」の「恋ひわびてな  
く音にまがふ浦波は思ふかたより風や吹くらん」(光源  
氏)であると思われる。

季―秋(月)

寄合

風トアラバ ……天津空……うはのそら…  
(連珠合璧集四九)

76 契り置く夜は立つかれぬる

一 一緒に月を見ようと約束しておいた夜は

前句の「見よやみん」を「月を共に見よう」という約束の会話と取りなし、「契り置く」と付けた。なお、「月」と「夜」は縁語。「月」と「夜」が共に出てくる歌に「秋

古今集・雑上・一五四三・寂超）、  
「秋の露も月のためとや契りおくとともに光をみがきはして」（玉葉集・雑一・一九八五・伊予）など。  
二「立うかれ」は「大騒ぎをして浮かれる」こと。歌例に「立うかれ夕しほ見てはみきはさへ沖つかはらに千鳥鳴くなり」（宗祇集・一六二）、「きみが住むゆゑとはなしに梅が香の隠るるまでは立ちうかれつつ」（雪玉集・七二七五）など。

一 歌例に「嵐吹く高ねの月のさえさえて霜にかがやく影のくまなさ」（為村集・一三二〇）、「真薦刈るほり江にうきてぬる鴨の今夜の霜にいかかわぶらん」（後撰集・冬・四八三・よみ人しらず）など。  
「霜にはた」の「はた」は「はたまた」の意。

二「裳裾」と「袖」を結んだ歌に「篠分けし袖こそあらめ今日は又谷のそほふき裳裾そぬらしつ」（宝治百首・三七七七・蓮性）、「夏衣今朝の山路の袖ほせば裳裾にのぼる野べの夕露」（草根集・三〇一九）などがある。

三 空気が澄みきっているさま。歌例に「さ笠の夜半の衣手さえさえて初雪白しをかべの松」（新古今集・冬・六六二・式子内親王）、「夕より荒れつる風のさえさえて夜深きままに霰をぞきく」（風雅・冬・八〇五・伏見院新宰相）など。

心がとても浮かれてしまう。

77 霜にはたもすそも袖も冴々て  
昌俊

一 晩中、月を見ていたので、霜に衣裳の主な部分もはたまた裳裾も袖も打たれて、冷え冷えとすることだ。

の夜の月の光しあかければくらぶの山もこえぬべらなり（古今集・秋上・一九五・在原元方）などがある。

季―無季

前句の「置く」に「置く霜」という語から「霜」と付けた。

寄合 霜：置霜：  
（拾花集一七六）

季―冬（霜）

一 歌例に「夜は寒し寝床は薄しふるさとのいもかはたへは冬ぞ恋ひしき」(好忠集・七七)、「山里は冬ぞさひしさまさりける人めも草もかれぬと思へば」(拾玉集・三五四)などがある。

二 「ことなる」は「殊なる」。歌例に「しがの浦の冴ゆる景色のことなるは比良の高嶺に雪や降るらむ」(拾玉集・三五)がある。

三 「大和なでし子」を詠んだ歌の例に「我のみやあはれと思はんきりぎりす鳴く夕かげの山となでしこ」(古今集・秋上・二四四・素性)、「あな恋ひし今も見てしか山賤のかきほに咲ける山となでしこ」(古今集・恋四・六九五・よみ人しらず)などがある。

一 「分くる」は野山の草を人が分けて進んで行くこと。歌例に「かり衣わくる野山のしばすりにうつろふ露の色ぞみだるる」(新撰和歌六帖・一七三八・藤原知家)、「夏がりのせこふみしだきわくる野にしほれやすらん小百合の花」(夫木抄・三一三四・殷富門院大輔)がある。

二 どの草葉も、の意。歌例に「しのびかね浮かれいでぬる我が心なにの草葉に宿を借るらん」(露色随詠集・三三六)、「武蔵野や何の草ばに隠れとて身はうき雲の行末の

78

冬<sup>一</sup>ぞ<sup>二</sup>ことなる大和<sup>三</sup>なでし子

昌琢

いのは。冬なのだ。ことさら大和なでしこが美しいのは。

前句の「霜：冴々て」に「霜さゆる朝の原の冬がれに  
一花咲けるやまとなでしこ」(夫木抄・六五五三・藤原定家)から「大和なでし子」と付けた。この歌が本歌であろう。  
季―冬(冬)  
秋(なでしこ)

79

分<sup>一</sup>くる野は何の草葉<sup>二</sup>もしほれ果<sup>三</sup>

行生

分け入って行く冬枯れの野はどの草葉もすつかり萎れている。

前句の「大和なでしこ」に「何の草葉も」と付けた。  
季節―冬(しほれ果)

空」(下葉集・五八五)など。  
三 すっかり萎れはてて、の意。  
歌例に「荻原やしげみにまじるか  
るかやの下葉が下にしほれはてぬ  
る」(夫木抄・四四四五・藤原俊  
成)、「こも枕たかせの淀にさすさ  
でのさてや恋路にしほれはてなん」  
(同前・一二三〇三・藤原家長)  
などがある。

一 歌例に「結びこし清水がもと  
は秋ながら暮るるを夏と思うころ  
かな」(碧玉集・三四五)、「月や  
どる清水がもとのうたたねは枕の  
したに氷をぞしく」(挙白集・六三  
一)など。

二 「しのぐ」と詠む歌例に「君ゆ  
ゑにしのご浪ぢをたちかへり見ぬ  
もろこしの物語りせよ」(拾玉集・  
八九四)がある。

三 「夏の日」の歌例に「うちなび  
く草葉すずしく夏の日のかげろふ  
ままに風たちぬなり」(兼好法師集  
・九五)、「しほれてぞ草にもなび  
く夏の日はうすき袖とふ風だにも  
なし」(柏玉集・五四二)など。

一 一坂を越えることを詠んだ歌  
に「一坂は越え残してむ位山老い  
ては進む道もくるしき」(雪玉集)  
・二六二四)、「山遠くかへる木こ  
りは夕暮の月になりてや越る一坂」  
(権大納言言継卿集・三一八)な  
どがある。

80 一 清水がもとにしのご 夏の日  
二 三  
玄陳  
草葉も萎れるほどの暑さを清水のもとで  
しのご夏の日である。

前句の「野」に「古の野中の清水みるからにさしぐむ  
物は涙なりけり」(後撰集・恋四・八一三・よみ人し  
ら)から「清水」と付けた。  
季一夏(夏の日)

81 一 坂を越つゝ喜らす山隠れ  
二 三  
信助  
清水でのどをうるおし、一つ坂を越えた  
り下つたりして暮らすことにしよう。山に  
隠れて。

前句の「清水」でのどの渴きを癒し、一坂を越えると  
した。なお、「清水」と「坂」が共に出てくる歌の例に  
「袖ぬれしせきの清水のおも影も越えて忘れぬあふ坂  
の山」(続後拾遺集・恋四・八九二・前大僧正実超)、「な  
き人の影やは見えん岩清水又あふ坂の関はこゆとも」  
(同前・哀傷・一二六〇・信生法師)などがある。  
寄合

二 山中に隠れること。「山がつ」の意で用いられることもある。歌例に「山隠れ消えせぬ雪のわびしきは君まつ葉にかかりてぞふる」(後撰集・恋六・一〇七三・よみ人しらず)、「山隠れ匂へる花の色よりも折りける人の心をぞみる」(風雅集・春上・七四・赤染衛門)など。

一 里から離れること。連歌に用例が比較的多く見られ、例えば文正元(一四六六)年三月以前の興行とされる『熊野千句』の第五に「いかにとも問う人あればの思ひ／里離れなる須磨のあはれさ」(九一／九二)がある。歌例には「里離れとほからなくに草枕旅とし思へば猶恋ひにけり」(万葉集・二二卷・三一四八・よみ人しらず／風雅集・旅・九四六)、「ひたすらに山かたつかぬ宿ながら里離れなる竹の奥かな」(草根集・八六五八)などがある。

二 「古板」のことと思われるが、歌例・句例・連歌の例いずれも見出せない。「板ぶき」又は「板屋」と「庵」が共に出てくる歌に「山陰にたのむ庵も荒れねとや嵐にかろき槓の板ぶき」(宝治百首・三七〇二・寂西)、「いかにぞと草の庵の雨の夜を板やにあらぬ軒ばにぞ聞く」(柏玉集・一六四七)などがある。

82

里一ばなれなる二ふるいたの庵

昌俊

山に隠れて、里から離れた古板の庵で暮らしている。

相坂を越るには：清水が本  
：  
季―無季  
(随葉集三九四)

前句の「山隠れ」に「里ばなれ」と付けた。

寄合

里 句作：里はなれ：(『竹馬集』四九九)

季―無季

一 なんとなく寂しい、の意。歌例に「心すむ夕のながめものすごし煙に暮るる里のひとむら」(光厳院三六番歌合・六一・太政大臣女)、「あふよだにから声になく鼻の物すごくさぞ聞やわびけん」(十市遠忠詠草・三九)など。

二 「鳩の声」の歌例に「折しもあれ花に雨よぶ鳩の声も色なき竹のおくのさびしさ」(柏玉集・三二八)などがある。句例に「年よれば気にこそかかれ鳩の声」(新增犬筑波集・一一一六)がある。

三 「藪原」は藪が生えている原。歌例は見出せない。句例もこの時代までのものは見出せない。連歌では用例が比較的多く、例えば弘治三(一五五七)年正月七日(九日興行の『弘治三年春雪千句』第九に「冬ごもるにも匂ふ梅が香／藪原の陰野の鳥のうつりきて」(七〇／七一)がある。

一 歌例に「ともしする五月の山の青つづら暮るる夜ごとに鹿や立つらむ」(新千載・夏・二七七・津守国助)、「山里は霧立ちこめて人もなし朝たつ鹿の音ばかりして」(新拾遺集・秋下・四六一・権中納言通俊)がある。  
二 「朝霧」と「鹿」を結んだ歌例に「立ちこめて猶朝霧の小倉山あくるもしらず鹿やなくらん」(草庵

83

物すごく鳩の声する藪原に

宣滋

物寂しく鳩の声がしている。古板の庵がある藪原の中で。

84

鹿や立らん朝霧の中

玄的

鳩の声を聞きつけて鹿が立ち上がるだろう、朝霧の中で。

前句の「ふるいたの庵」が藪原の中にあると見て「藪原に」と付けた。  
寄合

藪 句作 藪原

付合二ハ 里：草の庵：(竹馬集五二六)

鳩 句作 はとの聲

付合二ハ 山里 古畑：(竹馬集五三二)

鳩 鳩のこゑ：鳩ふく 秋 鳩ふくは秋の初かり 人の鳩をとらんとて手をして鳩のまねをしてふく事也：(拾花集三五三)

季―無季

前句の「藪原」に「鹿」と付けた。「原」と「鹿」とが出てくる歌に「み馬草に原野の薄刈りにきて鹿の臥床を見おきつるかな」(万代集・六七二・西行法師)がある。  
寄合

鹿 句作：朝立鹿：

付合二ハ 花野 萩原 真 葛が原：(『竹馬集』一三八)

季―秋(鹿)

集・四九〇）、「朝霧の野べたちわかれゆく鹿の跡に露けき秋が花妻」（草根集・四七二三）などがある。

一 一方では：一方では：、というのが基本的な用法。この句は「鹿がかつ立ち霜がかつ消ゆる」が略されている。歌例に「冬の日のうつろふ方がかつ消えて垣根に残る庭の朝霜」（延文御百首・六五八・尊胤）、「澄む月の光に雲はかつ消えていたづらに吹く夜半の秋風」（文保三年御百首・六四五・藤原実泰）などがある。

二 「伏見」は京都南部の地名。「小田」の「小」は美称の接頭語。「雁の来る伏見の小田に夢覚めて寝ぬ夜の庵に月を見るかな」（新古今集・秋上・四二七・慈円）、「穂に出づる伏見の小田を見渡せば稲葉に続く宇治の河波」（玉葉集・秋下・七四八・冷泉前太政大臣）など。  
三 「秋の霜」の歌例に「浅茅生や袖に朽ちにし秋の霜わすれぬ夢を吹く嵐かな」（新古今集・雑上・一五六四・久我通光）、「草も木もなびきし秋の霜消えて跡なき苔をはらふ山風」（拾遺風体集・哀傷・二一〇・鴨長明）など。

一 「芦の穂」の歌例に「入江こぐ小舟になびく芦の穂はわかるとみれど立ちかへりけり」（玉葉集・旅・一一〇八・藤原俊成）、「風吹ば

85 かつ消る伏見の小田の秋の霜  
鹿が立ち上がる一方で、置いたのに消えてしまふ伏見の田の秋の霜である。

政直

前句の「鹿」に「伏見山妻どふ鹿の涙をやりほの色  
の萩のうは露」（夫木抄・四七六一・藤原定家）から「伏見」と付けた。

寄合

伏見には 妻とふ鹿：

（『随葉集』二五七）

季―秋（秋の霜）

―秋（霧）

86 芦の穂ずへもひたす江の波  
芦の穂をその端の方まで浸している伏見の小田の近くの江の波である。

昌倪

前句の「伏見の小田」に、「巨椋の入江とよむなり射目  
人の伏見が田居に雁渡るらし」（万葉集・卷九・一七〇  
三・よみ人しらず）により、「江」と付けた。

入江にひたす芦の穂の水をたゞく水の月影」(下葉集・二五二)などがある。

二「ひたす」と「江」を結んだ歌に「かげひたす沼の入江に富士のねの煙も雲もうき島が原」(夫木・一一三八四・源光行)、「峰高きみどりを遠くひたす江の空もひとつにすめる月かな」(雪玉集・七一五)など。

三「江の波」の歌例に「過ぎゆけど人の声する宿もなし入江の波に月のみぞすむ」(玉葉集・旅・一二四六・藤原定家)、「かげ宿すつたのほそ江の波のまにうらがくれ行く短夜の月」(雪玉集・四七〇八)などがある。

一「初汐」は、ここでは陰暦八月一五日の大潮。歌例は見いだせない。連歌の例として大永二(一一五二)年八月四日(八日興行の『伊勢千句』第三に「浦遠く見えたる月の難波濁／芦辺やひたすのほる初潮(九五／九六)」が、俳諧の例に「初汐の鳴門や波のよせがまち」(時勢粧・一七五八・山田佳種)、「初汐もやらんやらよし湊舟」(同前・四二六六・西翁)などがある。二「沖吹く風」の歌例は見いだせない。句例に「かうじうり春風いとふ橋の上／沖吹風のいかにきつかる」(鷹筑波・二七四五・宗久／同前・二七四六・同前)がある。

87

初汐に沖吹く風もきほひ来て

昌琢

芦の穂末まで浸すほどの江の波が立ったのは、八月十五日の大汐の日に沖に吹く風が勢いを争うようにやって来たからだ。

季―秋(芦の穂)

前句の芦の穂をその端の方まで浸している理由を、付句では大潮の日に沖に吹く風が勢いを争うようにやって来たためであるとした。

寄合

浪

付合ニハ みつしほお きつ風： (『竹馬集』四

六八)

季―秋(初汐)

なお、「沖つ風」の歌例は「沖つ風夜半に吹くらし難波渦濤かけて波ぞ寄すなる」（新古今集・雑中・一五九五・権中納言定頼）など多数。三 「きほひ来て」の歌例に「里くもるかた野の雨はきほひきてあまの川すに鵲の声」（草根集・九三三五）などがある。

一 「月になる」の歌例に「月になる秋の心のいづくより我さへしらぬ涙おつらん」（夫木抄・五一・一三・藤原為兼）、「すみの江の古きみぎはに寄る波はいくよの秋の月になるらむ」（後鳥羽院御集・八〇五）など。  
二 「海子舟」の歌例に「櫓もおさで風にまかする海士舟のいづれのかたに寄らんとすらん」（和泉式部集・二九四）、「この風になびきもはてぬ海士舟の身をうらみつこがれてぞふる」（玉葉・恋三・一四九二・徽子女王）などがある。

一 砂浜、砂地。歌例に「枝かはず四本の末はれて庭しろくすむ真砂地の月」（延文百首・三〇四六・藤原雅冬）、「いかばかり空に照る日ぞ夕立の跡よりかはく庭の真砂地」（衆妙集・三二六）など。  
二 歌例に「雨ふれど暮るればもゆる夏虫のたれゆゑつつむ衣手の森」（夫木集・三二二七・藤原家隆）、「にはたづみ流れて人や見え

88 月に成より帰る海子舟

初汐で満潮になり、沖吹く風も強くなってきたので、月が出る前に海子舟が帰ってきた。  
宗順

89 真砂地や暮るれば夏の外ならん

真砂地も海子舟が帰ってくる夕暮れ時になると、涼しくなつて、夏ではない感じがする。  
貞重

前句の「沖吹く風もきほひ来て」に、風が強くなつてきて危険なので浜に帰るという意味で「帰る海子舟」と付けた。

寄合  
船 句作：おきつふね… あまをふね…  
付合二八 浪 しほとき… みなと江：蜃（あま）  
（竹馬集四四二）

季―秋（月）

前句の「海子舟」に、それが停泊する「真砂地」と付けた。

季―夏（夏の外）

くると暮るれば頼む夏の夕暮れ」  
(好忠集・一四七) などがある。  
三 夏ではないように涼しく感じられる、の意。歌例に「涼しさは夏の外なる栖かな山の岩根の松の下水」(新統古・夏・三三・西園寺前内大臣女)、「土さけて照る日も知らずきえせぬは氷室は夏の外にや有るらん」(堀河百首・五二三・藤原基俊) など。

一 「なら」はブナ科の落葉高木コナラと、それに近似のミズナラ、ナラガシワなどの総称。落葉樹。歌例に「神無月時雨降りおける櫓の葉の名におふ宮の古言ぞこれ」(古今集・雑下・九九七・文屋有季)、「神まつるけふのためとや霜がれの枝に残れる櫓のはがしは」(夫木抄・七四八七・藤原為家) などがある。

二 「葉うごく」の歌例に「椎の葉の動くばかりに鳴く蟬の声さへ聞けば涼しかりけり」(為忠集・九四) などがある。

三 「広前」は神仏の前の意。また、神殿・宮殿などの前庭。歌例に「広前にまさぬ心のほどよりはおほなほびなる神とこそ見れ」(統詞花・雑上・七七三・よみ人しらず)、「広前の庭火の光あきらけくかなづる袖を見るぞうれしき」(夫木抄・七四七二・隆源) など。

90

一  
二  
三  
ならの葉うごく神の広前

重信

涼しさをもたらしている社の大庭である。

前句の海岸の「真砂地」を神社の「真砂地」すなわち広前(大庭のこと)と取りなし、「神の広前」と付けた。

寄合  
真砂地 句作 真砂地：  
付合二ハ：神の前：

(竹馬集五七四)

季一夏(ならの葉)

一 「注連縄」を用いた歌の例に「そのかみに絶えなましかばしめ縄のかく引きかへて物は思はじ」（続後拾遺集・恋四・九一四・九条良経）、「御熊野や浜ゆふならぬしめ縄もいくへにかけて君を祈らん」（草根集・一〇六一〇）など。

二 歌例に「色終にまさる方にや引きとらんこなたかなたに二あひの帯」（草根集・八〇五四）、「これも世のひきびきなるか思ひあれや苗代水のこなたかなたに」（雪玉集・四〇六八）などがある。

三 長くのばす、引きのばす、さま。歌例に「苗代の小田のしめ縄ひきはへてはや山賤のいとまなきころ」（隣女集・一八五九）、「ひろまへに心のしめを引きはへて結ぶ神や神ぞしるらん」（難波捨草・四一五）などがある。

一 「いきぶれ」（行触）はけがれに行き合つて自分もけがれること。『源氏物語』「夕顔」に「いかなるいきぶれにかからせ給ふぞや」とある。歌例、句例ともに見いだせない。連歌例には、元和五（一九一）年五月九日興行の『元和年間百韻』に「朝清め神の宮人おこたりて／すするなりけり道のいきふれ」（七九／八〇）がある。

二 すみか、すまい。『源氏物語』「須磨」に「唐国に名を残しける人よりも行え知られぬ家ゐるやせ

91 注連縄をこなたかなたに引はへて  
豊一  
広前のそばの社に注連縄をあちらこちら  
の向きに引いて、掛けてある。

前句の「神の広前」に「注連縄」と応じた。  
寄合  
神 句作：神の廣前：  
付合二八：注連縄：  
（『竹馬集』四二九）

季―無季

92 いきぶれいとふ家ゐるしも  
順息  
注連縄をあちらこちらに引き掛けて、け  
がれに染まることを避けようとしている家  
がはつきりわかる。

前句の社に引いて掛けた「注連縄」を家々に引き掛け  
たものに取りなし、注連縄によって侵入が阻止されて  
いる「いきぶれ」を付けた。

季―無季

ん」とある。歌例には「山里の家  
るは霞こめたれど垣根の柳すゑは  
とに見ゆ」（拾遺集・雑春・一〇三  
一・弓削嘉言）、「秋山のふもとを  
こむる家みには裾野の萩ぞ籬なり  
ける」（千載集・秋上・二四八・藤  
原伊家）などがある。

三 はつきりしている、意。歌例  
に「物ごと秋の景色はしるけれ  
どまづ身にしむは萩の上風」（千載  
集・秋上・二三三・大蔵卿行宗）  
などがある。

一 「百敷」は「禁裏」、「宮中」の  
こと。歌例に「百敷や古き軒端の  
しのぶにも猶余りある昔なりけり」  
（続後撰集・雑下・一二〇五・順  
徳院）、「久かたの月ぞさやけき百  
敷の大宮人やあくがれぬらむ」（玉  
葉集・秋下・六三五・藤原家隆）  
などがある。

二 「近き」の歌例に「忘れずよ近  
き守りにつかへつつみゆきになれ  
し庭の橋」（嘉元仙洞御百首歌・七  
二三）、「つかへこしちかき守のか  
へなしも身のいにしへになるぞ恋  
ひしき」（年中行事歌合・六七・女  
房）などがある。

三 時代が下るが、「つかへ人き  
のふは鳥狩けふは釣いとまある世  
ぞいとまなげなる」（柿園詠草・八  
九八）の歌例がある。俳諧の例に  
は「律義にもまうけの君に仕へ人」  
（塵塚俳諧集・一一七八）、「住侘

93

百敷や近き守りのつかへ人

宮中では高貴な方々をおそば近くで  
お守りする人たちが働いている。

玄陳

前句の「いきぶれ」を『源氏物語』「夕顔」の中の頭中  
将のせりふ（前句の注釈の上段に挙げた）と取りなし、  
頭中将が禁裏の仕え人であったことから、「百敷」と付  
けた。「近き守りのつかへ人」も頭中将を連想させる。

季―無季

ぬ八瀬の山家のつかへ人」（俳諧塵塚・二三三・正章）などがある。

一「いかに絶ぬる」に近い表現を用いた歌例に「まもれ猶たえぬ流の石清水君につかへん末が末まで」（後十輪院内府集・一五五一）、「九重やつかえる道のたへぬ世もあとある雪のあしたにそみる（貞康親王御詠・六八五）などがある。

二「まなびなりけん」に近い表現を用いた歌例としては「何としてうちとの文を学びけんまくものぶるも物うかる世に（権僧正公朝）」（夫木抄・一五〇八四・権僧正公朝）、「学びみんやまと言の葉我としりて問ふべきにあらぬ道の芝草」（正徹千首・八七九）などがある。

一「木々に」が出てくる歌に「風ませにみだるゝ雪と散る花をふたゝび木々に返してもがな」（拾翠愚草集・九二五）などがある。  
二「はなよりまさる」の歌例に「花よりも紅葉の色やまさるらん秋くる雁の声きこゆなり」（洞院撰政治家百首・七八五・但馬）、「花よりもまさるか春はかへる雁間はばやかに旧里の月」（他阿上人集・一〇二四）など。  
三 墨書きの下絵に彩色すること。また、その絵。『源氏物語』『須磨』に「この頃上手にすめる千枝・常則など召して、作絵つかうまつら

94 いかに絶ぬるまなびなりけん 貞重  
どのようにして絶えてしまった、その学びなのだろうか。

前句の宮中の「つかへ人」を昔のこととし、どうして今はその「学び」が絶えてしまっただろうか、と付けた。  
季―無季

95 木々に咲く華よりまさる作絵に 昌琢  
今では技法を学ぶ者も絶えてしまったが、木々に咲く本物の花よりも作絵に描いた花の方が勝っていた。

前句の「絶えぬるまなび」（絶えてしまった技法学習）に「作絵」を付けた。この句は「手にかくるものにしあらば藤の花松よりまさる色を見ましや」（源氏・竹河・六一五・薫）の本歌取りである。この歌の「手にかくるものにしあらば」は「自分の思うようにすることができるなら」の意であり、この句の「作絵」に通じる。  
寄合

花トアラバ  
春の植物には梅・藤・櫻など有便。似物には雲・雪・瀧など可付之。…  
「似物」の注…真実の花でなくて、花のように見える物。（連珠合璧集三〇七）  
季―春（華）

せばやと」ある。歌例に「須磨の浦にたれ作絵を曙の麓の霧をまく嵐かな」(草根集・三六〇六)など。

一「屏風のよそ」の歌例、句例は見いだせない。連歌の例に、文明一五(一四八三)年興行の『文明一五年千句』第六に「帰れる雁を写し絵のあと／ふく風は屏風にあたる音なれや」(四二／四三)がある。なお、「屏風の内」について次の句がある。「此ほどは屏風の内の住居して」(犬筑波集・四百七)、「常盤木が絶ず紅葉屏風の絵」(犬子集・一二八六・正信)  
二「すさぶ」の歌例には「窓近き竹の葉すさぶ風の音にいとど短きうたたねの夢」(新古今集・夏・二五六・式子内親王)、「松にはふまさきのかづら散りにけり外山の秋は風すさぶらん」(同前・秋下・五三八・西行)などがある。

一 待宵は、来ることになつてい  
る人を待つ宵。歌例に「待つ宵の  
風だも寒く吹かざらば見えこぬ人  
を恨みましやは」(好忠集・二三  
六)、「待つ宵にふけ行く鐘の声き  
けばあかぬ別れの鳥は物かは」(新  
古今集・恋三・一一九一・小侍従)  
などがある。  
二「かすむ灯」の歌例に「灯の光  
ぞかすむ埋火の細きけぶりやねや  
にみつらん」(草根集・五七七七)、

96 屏風のよそはすさぶ春風

いつも同じ花の姿を保っている屏風の絵の方が勝っているのは、屏風の外は春風が吹きすさぶので花も散ってしまうからだ。

慶順

前句の「作絵」に「屏風」と付けた。一般的には「作絵」より、本物のほうが勝っているのだが、その理由を、春風が吹きすさび、花を散らしてしまうからだと言んだ句。

絵 句作 写し絵：作る 絵：  
付合ニハ：屏風： (連珠合璧集五八九)

季―春(春風)

97 待宵にかすむ灯かかげ置き

春風とともに訪れる人を待つ宵にぼんやりかすむ灯をかかげておいて。

重信

前句の「春風」に「梅の花匂ふあたりの春風や待つ人誘ふしるべなるらん」(続拾遺集・春上・四七・藤原資平)などから「待」と付けた。

季―無季

「見るままに庭の灯かすかにて七  
 夕まつり夜は更けにけり」(夫木抄  
 ・三九五一・藤原信実)など。  
 三「かかげおく」の歌例に「愚な  
 る心のやみを照らせとやかかげ置  
 きけむ法のともし火」(新拾遺集、  
 釈教・一四八二・尊道)、「かかげ  
 おく法の灯後の世のながき闇路の  
 するべともなれ」(続千載集・釈教  
 ・一〇一三・忠源)などがある。

一「かかげ」は目に見える物の姿や  
 形のこと。「鏡のかげ」の歌例に「な  
 れにける鏡のかげもあはれなりお  
 きそふ霜の色をかさねて」(新千載  
 集・雑上・一八一五・九条隆教)、  
 「行く水の花の鏡のかげもうしあ  
 だなる色のうつりやすきは」(新拾  
 遺集・恋四・一二六〇・藤原定家)  
 などがある。

二「かげうすき」の歌例に「霧深  
 みそこと見えねど影うすき月のの  
 ぼるや秋の山際」(玉葉集・秋下・  
 七四三・入道前太政大臣)、「影う  
 すき月見そめて庭のおもの草に虫  
 鳴く宿の夕ぐれ」(風雅集・秋中・  
 五八一・伏見院新宰相)など。  
 三 歌例に「かきみだすねくたれ  
 がみのまゆずみもうつりにけりな  
 さよの手枕」(風雅集・恋二・一一  
 〇七・後西園寺入道前太政大臣)  
 などがある。

一「身の齡」の歌の例に「玉椿は

98

鏡のかげもうすきまゆずみ

灯がかすんでいるので、鏡に映っている  
 姿も薄くなってしまうまゆずみである。

玄的

前句の「かすむ」に「かかげもうすき」と付けた。

寄合

鏡 句作：鏡の影：

〔証歌〕何をして翁さひけ ん朝毎に鏡の影をかつ  
 とか めつゝ(堀河百首・一五六 九・藤原公実)

(竹馬集五八八)

なお、本句には『長恨歌』の中で楊貴妃の最期を歌つた「宛転蛾眉馬前死」(宛転たる蛾眉馬前に死す)に通じる趣があると思われる。

季―無季

前句の「鏡のかげ」に、「うばたまのわが黒髪やかはる

99

身の齡かりりみらるる仇心

をみかけるや咲花の齡を移す鏡なるらん」(草根集・六二〇〇)、「つくづくと思へばかなし何事も後をまつべき身のよはひかは」(人家集・七一・法印良寛)などがある。

二「かへりみる」を用いた歌の例に「都のみかへりみられて東路を駒の心にまかせてぞ行く」(後拾遺抄・旅・五〇八・増基法師)、「まどひある人のうはさを思ふにも我が身の程もかへりみらるる」(今川氏真詠草・三五四)などがある。

三 浮気な心、まごころがなく移りやすい心のこと。歌例に「かりそめにつけたる松は甲斐もあらじこはえも言はぬ仇心かな」(江帥集・四二九)などがある。

一「思ひ侘て」が出てくる歌の例に「しづのめが聞もる月もさゆる夜は思ひわびてぞ衣うつなる」(建長八年百首歌合・二三〇・小宰相)、「世の中を思ひわびてやたけからぬねをのみぞなくかこつかたとて」(同前・一三八七・左京大夫)などがある。

二「うたふ一ふし」の歌例に「河竹や歌ふひさごの一ふしも神代くみしる水のみなかみ」(草根集・六一四七)、「山深みわけ入ささの一ふしを歌ふ木こりの声そさびしき」(紅塵灰集・四七一)などがある。

鏡に映る薄くなつた眉を見ては自分の年齢のことが思われてしまふ、移ろいやすい我が心なのである。

昌俔

らむ鏡の影に降れる白雪」(古今集・物名・四六〇・紀貫之)。歌意は、鏡に映つた白雪のような白髪を見て、自分の齡をかえりみた)により、「身の齡かへりみらる」と付けた。

寄合 雪トアラバ：鏡の影： (連珠合璧集四二)

季―無季

100 思ひ侘てやうたふ一ふし

宣滋

移ろいやすい心を抑え、自分の年齢を思い詫びて歌を一節歌うのであつた。

前句の「身の齡」に「思ひ侘て」と付けた。  
季―無季

※(よしだ・けんいち/本学非常勤講師)  
※(まつもと・あさこ/日本文学)